特定教育･保育施設等における事故情報データベース［平成30年6月29日更新］

No	初回掲載年月日	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
		認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面					ハード面								環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷		診断名			マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位					実施頻度【回/年】				実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】															
2027	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	4	1.朝(始業～午前10時頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	18			8	10				2	2	16.4歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手首の骨折	1.遊具等から転落・落下	1.あり	1.定期に実施	12	1.基準以上配置	「事故がどうして起きたの」を正しく判断・分析する。	園庭担当の保育教諭の数を増やす。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	13	1.定期的に実施	12	遊具点検、安全点検を、月に1回はしている。	不備があれば、すぐに対応する。	3.個人活動中・見守り	園庭遊びに出れるのは、園庭担当の保育教諭が放送でお知らせてからの活動になる。	園庭担当の保育教諭の数を増やす。	1.いつもお様子であった	仲良しの友達と楽しく遊んでいた。	4.対象児の動きをていなかった	いつも遊んでいた遊具だったので、他の気になる子を見ていた為、その場を離れてしまった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	園庭担当の職員は、至近距離にはいたが対象児ではなく、他の気になる子を見ていた。	4月当初なので、新入園児に手を取り、園に出る論保育教論同士の人数が少なくなっていた。園庭に出る時間帯を考えるようにする。	コンビネーション遊具のところには、必ず保育教論を配置し少しでも、その場所を離れる時には、保育教論同士で声かけしていく。4月当初は、各学年で安全な遊具の使い方を丁寧に指導したり、クラスでの集まりの時にも危険な遊び方をしないように知らせていく。	
2028	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	2	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	46	4	13		29				9	9	16.4歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	外傷性歯の脱臼	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期に実施	12	2.基準配置	異年齢構成の遊戯時に、園児に対する職員配置調整に不具合や、普段から運動をする時の園児同士の間隔（距離）のとり方に検討の余地があったと考えられる。	異年齢構成の室内運動時、面積や園児数、職員配置について危険因子がないか事前にシュミレーションを行う。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	24	2.不定期に実施	12	リズム運動時、付近には危険要因となる物はなかったが、年齢に応じた運動面の細かい発達の把握が不十分であった。	各年齢ごとのリズムの運動の内容と面積と職員配置バランスの直しを行う。	1.集団活動中・見守り	職員間で、恒例のリズムの認識があり、園児の行動範囲の観察が欠如していたと考えられる。	各年齢毎に、リズム運動時を観察し、園児の状況に応じて、誉め方、気分高揚して危険を伴う恐れがある場合落ち着よはかせるよう声掛けをする必要がある。	1.いつもどおりの様子であった	いつも決しまっていることであるために普段どおりに運動した。	2.対象児の近くで見ていた	リーダーになって運動を進めながら、3歳児全体も様子を見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	0・1歳児担任は、3歳児の運動も観察できる位置に、0・1歳児と一緒に、本児の傍には、他の3歳児担任が一緒に運動をしていたため、転倒もすぐに駆け寄ることができた。	0・1歳クラスの担任は全体の動向も把握しつつ、運動中に怪我に場合は、職員間で連携を図ることが必要である。	同じ空間（遊戯室）にいる時は、担任に関係なく全体の保育者として同じ意識のもと、園児の保育に関わらなければならない。	
2029	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	7	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	38					38			2	2	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左ひじ骨折	1.遊具等から転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	2	2.基準配置	体育講師が跳び箱のわきに居れば良かった。	職員がもうひとりつければよかった	2.不定期に実施	3	1.定期的に実施	24	2.不定期に実施	12	行動を行う一度安全確認。	跳び箱の安全確認あるもしても、周囲のマットも敷いてあった	1.集団活動中・見守り	少し自信がついて、余裕が出てきて、余裕が出てしまった	園児、職員共に危険性を考え、いつでも真剣でも取り組むようにしたい	1.いつもどおりの様子であった	真面目に取り組んでいたが、余裕がで気が少し緩でしまったのかもしれない	2.対象児の近くで見ていた	一連の動の中で、手を出したがきで、間に合わなかった	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	跳び箱と分鉄棒を分かれて見ていたので、近くにはいなかった	改めて注意事項を子ども達に伝える。	もっと職員の手があって配置できれば防げたかもしれない	
2030	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	9	3.昼食時・おやつ時	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	62			27	21	14			23	23	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手首骨折	3.子ども同士衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	1	1.基準以上配置	給食後で職員の人数が少なく、見守りが不十分だった。	給食後に部屋で見守りをする職員の人数と見守る配置を決め、職員間で共有する	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	96	—	—	3.個人活動中・見守り	給食後で職員の人数が少なく、見守りが不十分だった。	給食後に部屋で見守りをする職員の人数と見守る配置を決め、職員間で共有する	1.いつもどおりの様子であった	給食後に歯磨きするために以上児室に戻っていた。	4.対象児の動きをていなかった	給食後で片付けや他の園児の歯磨き対応等で人数が少なく、見守りが不十分だった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	給食後で片付けや他の園児の歯磨き対応等で人数が少なく、見守りが不十分だった。	給食後の少人数が少なく、見守りが不十分だった。	給食後に部屋で見守りをする職員と見守る人数と配置を決め、職員間で共有する	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】				実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】								理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2031	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	9	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	48	10	18	20					23	23	14.2歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右肘骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	1	1.基準以上配置	本児にとって活動する頻度の少ない園庭でのうんていで遊びであったが見守る職員の人数が少なく、見守りが不十分だった。	大丈夫だろうと個人で判断せず、危険が少しでもある際は、周囲の保育士への声掛け・及び共通意識を持って見守る。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	96	本児にとっては初めて使用する遊具であった。	個々の能力・発達を踏まえた遊具の危険性を想定しておく。	1.集団活動中・見守りあり	複数の遊具で遊んでいた。	遊具使用時は特に目を離さないようにする。	1.いつもどおりの様子であった	—	2.対象至対児の近で象児を見ていた	本児がうんていのスタート地点に登り両手両足を付けていることは把握していたが、他児2名が木のしごを登り始めたそちら為にそちらに手を添えて見守っていた	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	担当を割り振っていた	本児にとって経験の浅い遊具であったにもかかわらず見守り体制が薄かった	個々の能力・発達を予測することに必要に応じてルールを決めた険を予測する。人数の制限を設けたりする。	
2032	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	8	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	100					100			6	6	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	4.上肢(腕・手・手指)	右肘関節脱臼	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	3〜4	1.基準以上配置	事故防止マニュアル周知の徹底が不十分だった。	職員の配置を考慮していたつもりだったが、事故は発生してしまい、再度運動時の配置を検討すると同時に事故防止マニュアルの周知徹底。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	3〜4	運動時の園児の距離間が密接していた為	運動前に再度職員による器具の点検と園児への怪我に繋がる注意事項の指導。	個別指導の職員が複数いる状況にあり、園児全体を把握できていなかった。	事故発生時の状況を把握し、今後同じ事故が起きないようマット等の施設及び、職員の配置を考慮する。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通気に過ごして元気に過ごした	2.対象至対児の近で象児を見ていた	すぐに手伸べたが間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	すぐに手伸べたが間に合わなかった。	担当職員届の手の位置での練習ではなかった。	園児の見守りを怠らないように配慮する。	
2033	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	11	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	25								3	3	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	右足関節外側靭帯断裂（裂離骨折）	2.自らの転倒・衝突によるもの	2.なし	3.未実施	—	1.基準以上配置	通路や階段など走らない事を伝えていなかった。	階段などは飛び降りずに歩りいて降りるよう注意を促す。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	階段があるものの、クラスを移動する時などの園児が動いている。	通路なので危険な事をしないよう園児に話す。	4.個人活動中・子どもの	階段の下置に物を置いていたため通りにくなっていた。	階段の下置いてある物を撤去し通りやすする。	1.いつもどおりの様子であった	トイレを済ませ、保育室に戻る途中にある階段を降りようとしてつまずく。	4.対象児の動きを見ていなかった	クラスでにトイレくよう行くよう声をかけ、保育室で待っていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	取扱いがあっていた為、各クラスの各担任は保育室にいた。	保育室の目足外への目が足りならなかった。	級外の保育等士が廊下等に子どもが気いるを付けて見守る。		
2034	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	4.3歳児クラス	63								7	7	15.3歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨顆骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施	2	1.基準以上配置	年度当初で子どもがまだ安定していなかった。	年度当初のような、まだ子どもが安定して生活を送れない時期には、職員間で共通理解のもと、園庭での時間は園長、副園長、主幹保育教諭等を園庭全体が見られるように配置す	1.定期的に実施	3	1.定期的に実施	24	1.定期的に実施	200	砂や水がなくても走ると滑るのある可能性場所である	滑ってしまった原因について確認。雨や砂で滑りやすい状況ではなかったが、子どもが園庭に出る際には砂を掃いておくなど引安今後も引き続き安	1.集団活動中・見守りあり	園庭で子ども達が遊ぶ時に、担任と副担任のみの見守りだっ	園庭での遊びや園児が大勢で活動するときは、担任はもとより園長、副園長や主幹保育教諭、フリーの保育教諭が安全のために子どもたちの見守りを	3.いつも活発で活動的であった(理由	入園間もない時で、園庭で遊べることに、ややの気持ちが高ぶっていた様子だった。本児に事故後様子を聞い	3.対象児から離れたところで対象児を見て	担任は少し離れたところで全体を見ていたため、本児がぶつかるのは防げなかった。同時刻に園庭で遊んでいたクラスの保育教諭も、	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離	他の園児の遊びも同時に見ていた。	全体を見る教員がいなかったと共に、入園間もない園児の状況の	入園進級後ないの間もない日の子ども心や行動が浮足立っ時期には、よてしまう時り丁寧に安全面について指導するとともに、職員間の共	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
																											ソフト面								ハード面									環境面			人的面								
		認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者											マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・保育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
	初回掲載年月日			月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等	年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因				実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】															
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他						死亡	負傷																																
																					死因	負傷状況	受傷部位	診断名																														
2035	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	11	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	96				34	32	30		5	5	16.4歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	前歯 外傷性亜脱臼	2.自転 衝の倒 よるもの突	1.あり	1.定期的に実施	2.基準配置	降園のためのバスを待つ時間、年も違ざんでい た。	集会等で、子ども達も安全な方に伝えるも機会を、意識を高めていく。	1.定期的に実施	3	1.定期的に実施	24	1.定期的に実施	200	砂や水がなくても滑る可能性場所である砂なくて走ること	今回も砂や水等の影響は無かったが、子ども達が園庭にでる際には滑りやすい箇所の砂、水を除く取りことの確認を徹底し、一層の安全配慮を心掛ける。	1.集団活動中・見守り	バスを待つ時間、年齢が混合で複雑になる。もの気持ちが先走りで、注意が散漫になる。	園児が思い思いの遊び場所で遊び、保育教諭が保育室内のみにとどまってこと。	園庭での遊びや、園児が大勢で活動する時は、担任はもとより園長、副園長、主幹保育教諭、フリーの保育教諭が、安全のための見守りをする。また、危険予測をし、即時に保育教諭共通理解できるようにする。	1.いつもお様子であった	特に動きの激しい子ではなく、運動も好きな方なので、身体的にはとくに問題がありたくい。また、本児のほかに子どもがいなかったので、押されたりしたことはない。本児が何らかの原因でつまずき滑ってしまった結果と考える。	3.対象児から離れたところで児ていた	少し離れたところで全体を見ていたため、本児が転んで階段にかるぶつかったのは防げなかった。同時刻に園庭で遊んでいたクラス保育の教諭も、本児と一緒で子どもたちと一緒に遊んでいて、本児が転んだから気づいた。	2.担当者・対象児の動きを見なかった	担当のバスに乗る子ども達と一緒に遊んでいた。	職員同士の連携が不十分だった。	個人的に何かを深め、園児が安全に生活できるように注意する。	バスを待つ自由遊びの時間は異年齢の縦割りの活動と同じなので、保育教諭も子ども達の様子をお互いに伝え合って共通理解できるようにする。園児と遊ぶ職員、見守りの職員が各々の役割を確認し何かあった時には対応できるようにする。子どもたちには園庭での遊び方や遊具の安全な使い方等の安全面について指導するとともに、職員も定期的に安全について職員会議等で確認する。	
2036	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	3	1.朝(始業～午前10時頃)	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	39								2	2	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	4.創傷(切創・裂創等)	2.顔面(口腔内含む)	顔面汚染 創 顔面割創	3.子ども同士のものの衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	2.基準配置	同じ階の保育教諭同士も子どもが遊びつ方いて共有し、自由時間時は特に職員が連携しながら、子どもたちをいくがあった。見て必要っ	安全対策の研修に出向き、職員の意識を高める。また、朝礼において安全に子全面する意識づけを行う。	1.定期的に実施	24	1.定期的に実施	24	1.定期的に実施	12	まごとコーナー廊下ままコーナー共に下、廊下からごとナー共に死角となったため、互いに死角同士から死角の出しとまった。	安全対策に関する意識づけを行う。	1.個人活動中・見守り	園児は、廊下を走るということの危険性を日頃から伝えていく。	園児に、廊下を走ると、いうことの危険性を日頃から伝えていく。	1.いつもお様子であった	まごと終遊びに移遊び、他児とほかの遊びに移動しようとした。	4.対象児の見ていなかった	隣の教室へ用具を取りに行き、本教室を離れていた時見ていなかった。	1.担当者・対象児の動きを見た(至近距離にいた)	教室内で他児との遊びに関わり、至近距離にはいたが、衝突の瞬間は見えていなかった。	子どもの特徴について、事前に共有し合い、担任の学年以外の子でも注意しなければならいことを確認し、1日の計画を職員全体で把握しておく必要があった。	職員が園児のそばから離れる時には、必ず他の職員にその事を伝え、注意喚起をする。また、職員は、室内と廊下に分かれて園児の様子を見ているよう配慮する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面									
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】						理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか				
2037	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	11	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	3.2歳児クラス	41								7	7	14.2歳	1.男児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	2.顔面(口腔内含む)	外傷性歯牙脱臼	2.自ら転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	1.基準以上配置	ミーティング時等でけがに対する防止策等話し合っていたが、活かされていなかった。	7名の職員で子どもの活動に合わせ、対応できるように職員配置を行う。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	0歳児体育館前の廊下に避難車が置いてあった。	0歳児用の避難車は園児が普段通らない場所・すぐに避難車として使える場所を考え、休憩室前の廊下に保管することとする。	1.集団活動中・見守りあり	移動する通路に不要な避難車があることの危険性に気付くべきであった。	子どもの動線を考え、廊下には不要なものは置かない。	3.いつもより活発で活動的であった(理由を記載)	部屋を移動することが嬉しく、すぐに走り出た様子だった。	2.対象児の近で対象児を見ていた	対象児が避難車に瞬間に手を伸べたが、間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	他児と関わっていたため、対応することが難しかった。	担当保育教諭等の危険予測が十分でなかった。	廊下に不要なものを置かないこと を職員へ周知し、園児の動きに 合わせて、職員間で連携し声を掛け合い、対応する。	
2038	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	12	7.午後	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	44								3	2	17.5歳	1.男児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	2.顔面(口腔内含む)	外傷性Lux下唇裂傷	2.自ら転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	1.基準以上配置	44名の園児、指導員1名、職員3名であった。	職員の配置については、十分であると考える。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	園児自身の縄跳びが怪我の原因となった。	運動の練習前には、あらゆる事故を予測し、不要な物を置かない等環境を整える。	1.集団活動中・見守りあり	跳び方にあわない園児に対し配慮すべきだった。	事前に園児への注意喚起を共に、縄跳びのとび方については、縄に足が掛からないような跳び方の指導を行う。	1.いつもどおりの様子であった	給食後、普段と変わらない様子だった。	2.対象児の近で対象児を見ていた	全員で縄跳びを練習する様子を見守っていると き、対象児が瞬間に手を差し伸べたが間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全員を見守っていたが、瞬間のこと で間に合わなかった。	一人一人の運動能力を把握に必要に応じて、すぐに職員がるしておくべきであった。	運動の練習前には、あらゆる事故を予測し、環境を整えると共に、常に全体に目を配り、特に注意が必要な園児に対しては個別に声をかける。	
2039	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	10	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	2.1歳児クラス	34								7	7	14.2歳	1.男児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	4.上肢(腕・手・手指)	右母指打撲傷	4.玩具・遊具施設・設備の安全上の不備にもの全上のの	1.あり	1.定期的に実施	1	2.基準配置	職員配置は十分であった。研修等で確認しあったことが活かされなかった。	園児の動きを常に把握し、危険が予想される箇所には園児を近づけない職員を配置する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	子どもの子行動を予測し、安ごに過ごせる環境とはていなかった。	すぐに扉が開閉できないようにカギをつけ、園児が開閉しないようにする。	1.集団活動中・見守りあり	扉の近くに子どがいた場合、注意して見守る必要があった。	園児の様子を把握し、職員間で声を掛け合い危険を回避する。	1.いつもどおり様子であった	普段と変わらない様子だった。	2.対象児の近で対象児を見ていた	対象児が手を挟む瞬間に手を差し伸べたが間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	他児と関わっていたため、対応することができなかった。	扉の危険予測を常にお、すぐに対応する配置きにすべきだった	担当職員のみが開閉を行い、周囲に園児がいないことを確認し開閉を行う。扉の周囲に園児が行かないよう注意を払う。	
2040	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	10	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	19								2	2	17.5歳	1.男児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	左鎖骨骨折、左肩挫傷	2.自ら転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	2.基準配置	保育教諭同士で園児の安全確認を行っていたが十分ではなかった。	保育教諭同士でどう動くべきなのかを再確認し話し合っていく。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	安全管理には配慮していたが、十分ではなかった。	保育室内危険箇所を予知し、危険な物は固定させたり、危険であることりえ繰伝返し示していく。	3.個人活動中・見守り	友達と遊んでいて、楽しくなって気持ちが高揚しつつある状態だった。	危険と感じたものした置を出し、きっぱなしたりせに、速やかに片づけをする。	1.いつもどおりの様子であった	保育室で遊びを転々としながら、友達とふざけて遊んでいた。ふざけ合いが徐々にエスカレートしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	保育室で一緒に遊んだり、様子を見ていた。友達と遊ぶ様子を見て「危ないから降りてね」と声をかけたが、ようと降りとしなかった。その後、目を離した時に転げ落ちてしまった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	遊戯室でいる園児の様子を見たり、一緒に遊んだりしていたため、見ていなかった。	「危ない」ということは伝えていた言葉行止う園児えが、のみで制止ことのみ動することはしなかった。	目配りを忘れず、危険なものは前もって片づけるように共通理解しておく。勝手な判断をせず、いつもと様子が違う時には、看護師に看てもらうようにする。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面						環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】						理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2041	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	1	7.午後	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	84								5	5	18.6歳	1.男児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右小指基節骨頭部骨折	8.その他	1.あり	1.定期的に実施	12	1.基準以上配置	ドッジボールの園内予選ということで、担任職員の他2名の補助職員がいた。しかし、ボールの取り方をしっかりと見ることが出来ていなかった。	ボールの取り方の指導を行うとともに、試合中や練習終了後怪我の有無が無いか視診や確認を行う。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	木製フローリングで特に問題はなかった。	特になし	1.集団活動中・見守り	指先でボールを取ったボールの取り方についての指導が不十分であった。	どの様にボールを取れば良いか実践しながら指導を行う。	3.いつもより活発で活動的であった(理由を記載)	意欲的にドッジボールに取り組んでおり、活発的であった。	2.対象至で対象児の近く見てい見た	試合中対象児の動きを見ていたが、ボールの取り方までは見ていなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	担当職員同様にボールを目で追っていたが、取り方までは見ていなかった。	室内遊戯室には5名の職員がおり、ホール内を行き来しながら見ていた為、問題はなかった。	ボールの取り方もしっかりと確認し、危険がないか把握していく。又、終了後に視診と怪我の有無の確認を行う。	
2042	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	12	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	6.5歳以上児クラス	31								2	2	17.5歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右尺骨近位端骨折、頭部挫傷	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	2	1.基準以上配置	山が出来なかった為、使用状況の報が乏しかった。	園庭遊びの際には遊具のそばに必ず職員がつくようにし、園庭を使用する全学年の職員で連携する。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	200	子どもが山を駆け下りた場合の十分なスペースが確保されていなかった。	遊具の設置場所が適切であるか再検討する。	1.集団活動中・見守り	集団遊びで山を使用可としていたこと。	集団遊びの際は遊具のそばで遊ばないよう注意を促す。	1.いつもどおりの様子であった	一緒に氷鬼をして遊んでいた。	2.対象至で対象児の近く見てい見た	一緒に氷鬼をして遊んでいた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	保育室で他の園児を保育していた。	子どもと一緒に遊ぶ中で、園児一人ひとりの動きに注意をはらえなかった。	子どもの行動から事故を予測し、注意を促す声掛けをするなど早期対応をする。	
2043	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	12	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	5.4歳児クラス	54								6	5	17.5歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	軟骨骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	2.なし	2.不定期に実施	2〜3	1.基準以上配置	初めて使用する遊具だったため数では問題ないが、大勢になると接触したりなどの危険性が増すことに気付かなかった。	事故について話し合った結果を職員全員が周知し、今回の事故がトランポリン型遊具での事故の危険性を日常に意識し、園児の遊びに勢いが付きすぎていないか注意して見守る。	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	遊具の安全な使用法を把握していなかった。	遊具等に不備は無かったため、特になし。	1.集団活動中・見守り	事故が起こりうる場所を理解していなかった。	事故の事を念頭におき、危険があった箇所に必ず保育教諭を配置するなどして、子どもたちが安全に遊べるよう保育を行う。	1.いつもどおりの様子であった	数人の園児ととも大型遊具で飛び跳ねて遊んでいた。	2.対象至で対象児の近く見てい見た	施設職員が傍いていたが、数人が飛び跳ねていたため、本児が足をひねってしまいたことに気付かず、本児が泣いている姿を見て、初めて気づいた	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	施設職員が傍についていたのくれた、教諭はそれ以外の園児をみていた	基準以上の職員配置されていると、施設職員がいることで安心してしまった。	集団でトランポリン形の大型遊具を使う場合は、人数を制限したり、動く方向を統一したり全に楽しめるよう促す。	
2044	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	2	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	6.5歳以上児クラス	14								6	3	17.5歳	1.男児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	右足脛骨骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施	7	1.基準以上配置	スキー指導員が2名指導に当たっていて、職員も4名いる状態であったが、当日はリフト子3名ともに乗るに名ついていたため、通常より配置が少なくなっていた。	スキー指導員を増やし、職員数を増やして対応するとや、グループの数を減らす対応を行う。	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施	50	1.定期的に実施	50	スキー場のため、別事業者が管理。	負傷者発生時における迅速な対応について、スキー場管理側と確認した。	1.集団活動中・見守り	—	転倒等の多い冬季の活動においては特に注意喚起を強化する。	1.いつもどおりの様子であった	—	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	スキーをしている子ども指導、見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	担当職員同様、子ども達を指導、見ていた。	事故を職員が見ていたが、大ケガをしていると判断できず、スキー学習が終わって帰るまで気づくのが遅れた。	体調不良やケガに対応できる専属の職員を必ずず1名配置するように改善する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面										
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由	具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2045	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	9	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	6.5歳以上児クラス	15								1	1	17.5歳	1.男児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕骨顆部骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	3	2.基準配置	使用する遊具を指定すべきだった	職員の人数（配置）を考慮し使用する遊具を決めて遊びをすすめる	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	鬼ごっこをしてい たため逃げるのに夢中になってすべり台からすべり降りようとして足を踏み外した	鬼ごっこの最中は台のすべり台を使わないよう指導した	1.集団活動中・見守りあり	鬼ごっこで固定遊具の滑り台も使用していた	鬼ごっこ時をする時は固定遊具を使わない指導した	1.いつもどおりの様子であった	鬼ごっこをしていたため、急いで滑り台から降りようとして足を踏み外した	2.対象児の近で対象児を見ていた	滑り台階段の反対側にいたため、落下する瞬間に合わなかった	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	もう一人の教諭は半数の園児の室内あそびを見守っていた	—	遊びを見守る保育者の位置や遊びの約束事の確認等、安全点検に万全の配慮をする	
2046	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	4	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	5.4歳児クラス	31								5	5	16.4歳	2.女児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	左鎖骨骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	2	1.基準以上配置	本児の転びやすいという発達の状態を持ち上がりの担任は把握していたが、他2名の担任とは情報共有していなかった。	研修等を通し運動遊びの配慮事項を確認し合う	1.定期的に実施	4	1.定期的に実施	8	1.定期的に実施	12	特になし	戸外活動においてのリスクの洗い出し及び、事前調査。	1.集団活動中・見守り	枯草の下に隠れていた枝への安全確認を怠った。	設定保育直前の安全確認や情報収集を行なう。	1.いつもどおりの様子であった	現地までは、連手で列をなして落ち着いて歩いていたが、自由に活動になった際、心身ともに解放的になったため足元を確認せず走り出した。	2.対象児の近で対象児を見ていた	子どもの反応や発言する言葉に対応出来る様人員配置をしていた。本児が転倒の際も手を伸べたが間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	先頭の保育教諭が隠れている枝に気が付かず、後続の保育教諭が発見する前に本児が転倒してしまった。	クラス全体の危機管理意識が薄かった。	転倒の際両手が出なかった。四肢の発達を促す遊びを取り入れる。	
2047	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	12	3.昼食時・おやつ時	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	54								2	2	18.6歳	2.女児	—	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	右第2趾基節骨骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	2.なし	1.定期的に実施	2	2.基準配置	整列する際の間隔、慌てる園児への声かけ不足	落ち着いた行動と整列の際の間隔を広くあけるように指導	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	3.未実施	—	特になし	特になし	1.集団活動中・見守りあり	特になし	広いところで整列をする。	3.いつもより活発で活動的であった(理由を記載)	人気のホールでの運動遊びの為、全体として興奮気味であった。	2.対象児の至近で対象児を見ていた	整列の為、すぐそばにいた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	整列の為、すぐそばにいた。	特になし	興奮を鎮めて行動させる。	
2048	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	6	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)												17.5歳	1.男児	—	7.登園・降園中(来所・帰宅中)	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕骨外果骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施	事故防止年間計画、学校安全計画	1.基準以上配置	—	事故場所での安全面の指導、予防策を検討。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	—	危険な場所の角にをした。花壇にマットをひいた。	7.その他	—	普段の遊具の使い方を見守る。	1.いつもどおりの様子であった	健康状態も良好であり、午前中も体操教室等に参加していた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	職員が少たし離れたテラス部分から園庭にいる対象児を確認したが、落下の際間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	至近距離にいたが子どもの管理をしていたため、落下した際に間に合わなかった。	—	見守りの数を増やす。危険予知し、目を配る。	
2049	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	6	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	13	1	5	2	2	1	2		7	7	16.4歳	1.男児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕骨顆上骨折、左消橈骨遠位端骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施	事故防止年間計画、学校安全計画	1.基準以上配置	—	事故が起こった原因や再発防止に向けて話をした。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	—	人工芝は敷いてあったが遊び方について再度確認するようにした。	1.集団活動中・見守りあり	—	クラスごとに遊具の握り方などの話をした。	1.いつもどおりの様子であった	午前中も、室内遊びをして普段の様子で過ごしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	園庭で使用した遊具を片づけをしながら見ていたため、落下した際に対象児を受け止めたが間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	担当職員と同じく片付けと他児の対応をしていたため、至近距離にいたが対象児を受けとめることができなかった。	—	遊具の安全な遊び方などクラスで確認するようにした。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面								環境面			人的面							
				月	時間帯			人数	異年齢構成の場合の内訳							うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
									0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他						死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】							実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							具体的に何をしていたか			具体的に何をしていたか			
2050	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	9	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	54		9	11	13	21			6	6	16.4歳	1.男児	—	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕骨顆上部若木骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施	事故防止年間計画、学校安全計画	1.基準以上配置	—	遊び方の指導。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	—	遊具及びその他の遊び場の安全性の見直し。	3.個人活動中・見守りあり	—	普段の遊具の使い方を見守る。	1.いつもどおりの様子であった	いつもどおりの様子で保育活動をしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	遠くからうろうろしていて遊ぶ本児を見ていたが、落下していた際に合わなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の幼児と関わり対応していたため。	—	遊具側に保育教諭を配置する。	
2051	平成30年6月29日	1.認可	1.幼保連携型認定こども園	4	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	62				30	32			8	8	17.5歳	1.男児	過去に10回の痙攣を起こしている。園では平成29年5月●日に1回目平成30年3月●日に2回目、今回が3回目のけいれんだった。また、無熱性けいれんは今回が6回目だった。脳波の検査を過去に7回（半月に1度）したが、異常は見られなかった。不整脈から来ているのかもしれないということで平成29年10月●日に検査をしたが、異常は見られなかったので、自律神経の乱れが原因ではないかと言われている。次回平成30年4月●日にかかりつけ医に受診予定。	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	1.意識不明		無熱性けいれん	8.その他	1.あり	3.未実施	—	1.基準以上配置	痙攣前に起きやすいと言われている異常行動が、今回は直後に判断できたが、非常にわかりづらいので判断が難しい。	いつ、どこで起きるかわからない以上、四六時中目が離せない状況だが、人的配置は難しいので、全職員で見守っていくしかできない。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	2	3.未実施	—	緊急時にかかりつけの医療機関に受診できない。	かかりつけの医療機関に救急搬送できないため、救急対応の措置について、主治医と相談してもらうように保護者に依頼した。	3.個人活動中・見守り	園長・副園長が小人学校で不在だったが、前年度に経験した職員がいたことで冷静に判断し行動ができた。	引き続き緊張感をもって、声を掛け合いながら職員間で連携を図り、園児の安全を確保していく。	1.いつもどおりの様子であった	普段と特に変わった様子は見られなかった。	4.対象児の動きを見ていなかった	本児の行動を担任だけでなく、園庭にいたすべての職員が見守っていたので、今回は痙攣直後に対応ができた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	担任はもとより、本児の様子をすべての職員が気にかけていた。	今回は、保育している子どもの人数が少なく十分にいた対応ができたが、朝夕の時間や土曜日等、職員が少ない時に起きた時の対応を考える必要がある。	実際にシュミレーションをし、本園児への対応マニュアルを作成していく。	
2052	平成30年6月29日	1.認可	2.幼稚園型認定こども園	3	1.朝(始業～午前10時頃)	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	25			8	8	9			2	2	18.6歳	1.男児	自閉症スペクトラム	2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	上腕骨顆上骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	2.なし	2.不定期に実施		2.基準配置		なにか起きた時に迅速に対応できるように、子どもにこりる事故を起こる事を把握し、すぐに対応できるように知識を得て	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施	12			1.集団活動中・見守り		いつでも対応できるように子供ら目を離さないようにする。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通りだったが、おまごとが盛り上がまごとが盛り興奮していた。	2.対象児の近く象児見ていた	近くで満児を抱っこしながらおままごとをみていると、本児が靴下で走りだしたので、いつもの様に「走らないでね。転んでしまう。」と注意をした。しかし本児は走る事を止めず直	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	クラスに他の園児を対応していた為見ていなかった。	三月という事もあり、年児は卒園近く間近で向持ち高ち興奮気味の子もみられていた。	けが等の対応について職員間で再確認するとともに、子どもたちにお部屋での遊び方の注意をきちんと伝達する。		

No	概要					発生時の施設・事業体制										事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面								環境面			人的面							
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳									うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由	具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか				
																																いく。																			
2053	平成30年6月29日	1.認可	2.幼稚園型認定こども園	4	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	55			22	33			4	4	17.5歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		6.その他	4.上肢(腕・手・手指)	肘内障、及び左肘の骨にひび	8.その他	1.あり	2.不定期に実施	3	1.基準以上配置	2クラス全体で、50名が一斉に動いていた。	一人ひとりの動きが見えるよう空間をよる。	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施				1.集団活動中・見守り	年伝いをしているときにぶつかる・階段を上るときに肘を打つ・保育室やロッカーにぶつけるこのような要因が考えられるが不明。	活動中の整理、人の動きの整理、誘導。	2.いつもより元気がなかった(理由を記載)	登園時の健康状態はなかったが、園庭で自由遊びの中、母親に会いたくなったと泣いた。担任が車から一緒に過ごし落ち着いた。30分頃に年少女児の降園準備を手伝い、50分頃に保育室に戻った。	2.対象児の近で見ていた	保育室に戻り降園準備を始めるが、進めることができなかったとができなので声をかけて「痛くて動かない」と訴える。「いつから、どこが痛くなったの、何があったのか」などと質問するが、把握できたのは「今つい痛くなった」ということのみだった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	クラス全体の補助として、活動を見守り援助していた。	年長33名、年少22名が一斉に動いた。	一斉に動くのではなく、いくつかのグループに分けて、年長・年少各4名ずつに先生1名がついて動く。	
2054	平成30年6月29日	1.認可	5.幼稚園	11	7.午後	1.施設敷地内(室内)	4.3歳児クラス	19				2				2	16.4歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	5.下肢(足・足指)	膝上骨折（左大腿骨遠位骨端線損傷）	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	2	2.基準配置	・受傷時、マニュアルを参照せず、適切な対応ができなかった。・日頃から靴下のままで活動すると転倒する危険性を伝え、上履き・イグサ草履・素足で活動する指導。・全職員は二重になっても各々が上司や同僚に報告・連絡・相談を行う。・上司は何でも言ってもらえるように職場環境を整える。・園での受傷時（後日発覚しても）必ず受診に同席し、誠意を表す。・受傷時、医師説明を聞き、医療機関と連携を図り、安全な園生活を提供する。・受傷時、マニュアルを参照し、適切な対応を行う。・日頃から靴下のまま活動すると転倒する危険性を伝え、上履き・イグサ草履・素足で活動する指導する。・全職員は二重になっても各々が上司や同僚に報告・連絡・相談を行う。・上司は何でも言ってもらえるように職場環境を整える。・園での受傷時（後日発覚しても）必ず受診に同席し、誠意を表す。・受傷時、医師説明を聞き、医療機関と連携を図り、安全な園生活を提供する。	1.定期的に実施	22	1.定期的に実施	22	1.定期的に実施	22			1.集団活動中・見守り			1.いつもお様もりの子であった	本児は降園準備ができてるだった。いろいろな興味をしていることが難しい。言葉だけの指示は入りにくい。	1.対象児とマンツーマンの状態（対象児に接していた）	降園前の絵本を読む準備をしていたが、本児があることを求めてきたので、一緒にふれあって遊んでいた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の子どもの降園準備を手伝ったため、対象児の見ていた動きはなかった。	・担任・加配教諭は靴下はいてジャンプしても何も思わなかった。・担任・加配教諭は軽微な怪我と思い込んだ。・担任・加配教諭は多動な児で言葉が入り特性を理解しながらも、危険性が伝わりにくい特性しなかった。	・靴下のまま活動していたら、危ないと注意し、制止する。・園内の怪我や事故時、安易なものと判断しない。・園長を始めとする全職員の危機意識の向上に努める。	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																													掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面										
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡 死因	負傷 負傷状況	受傷部位	診断名		マニュアルの有無	事故予防研修	実施頻度【回/年】	職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検	実施頻度【回/年】	遊具の安全点検	実施頻度【回/年】	玩具の安全点検	実施頻度【回/年】	その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き	理由	担当職員の動き	具体的に何をしていたか	他の職員の動き	具体的に何をしていたか	その他要因・分析、特記事項	改善策	
2055	平成30年6月29日	1.認可	5.幼稚園	1	7.午後	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	23								2	1	17.5歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左中指末節骨骨折、左環指末節骨骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	3	2.基準配置		職員間の連携を図り、遊びの様子を見守った指導したりしているが、積み木の扱い方、約束について職員間で確認した。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12		月に一度点検は必ずしている。また、日々の環境整備の時にも気を付け、改善が必要な個所は迅速に対応するようにしている。	3.個人活動中・見あり守り		積み木を積む高さ、積み方について幼児に改めて指導する。	1.いつもどおりの様子であった	前日から積み木を積み、家に見立てて遊んでいた。引き続き家と一緒に積み木の家の中で遊んでいた。	4.対象児の動きを見ていなかった	教師も積み木の家に入ろうとしていたが、他の幼児に誘われていたことだったため、対象児は視線から外れていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	弁当後の片付けをしている他の幼児にかかわっていた。			
2056	平成30年6月29日	1.認可	5.幼稚園	3	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	7.異年齢構成	92				38	54			10	9	18.6歳	1.男児	登園時に保護者より、休日中に股関節に痛みがあること、副鼻腔炎気味で体調もすぐれないと保護者から連絡を受けていた。	8.その他	1.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯の外傷	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	20	2.基準配置	避難場所が小学校という普段の生活の場ではない場所への避難であったため、その配慮が不十分だったのではないか。職員の配置場所等に課題が残った。	小学校の階段を使用する際は、職員として、先頭に担任、各階の踊り場(3箇所)に固定の職員を配置する。小学校の階段を使用する際は、職員配置とし、先頭に担任、各階の踊り場(3箇所)に固定の職員を配置する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	192	小学校の階段は、幼稚園の階段と段差や素材が違い、滑りやすい園児にはまだ慣れない階段であった。	今後も小学校の階段を使用する際は必ず下見をし、危険な箇所や安全に行どうかの確認をする。	1.集団活動中・見あり守り	総合の避難訓練で園庭から速やかに小学校へ移動し、4階の廊下まで避難したが、体力的に疲労した園児もいたのではないか。	園庭から4階までの移動は体力的にも疲れが見られたり、慣れないと下からと下から登る園児にとって慌ててしまうも予想れるので、一列でゆっくりと登り十分な見守りかけを声徹底して行う。	1.いつもどおりの様子であった	9時20分に登園し速やかに身支度を整え避難訓練に参加する。今回の避難訓練では地震から津波と河川の決壊を想定した訓練で、小学校の4階へなんとか避難し、下からも登くる園児もおり、普段より慌て階段を登った。	4.対象児の動きを見ていなかった	クラスの園児を連れて担任が先頭になって階段を登り、その方都度後方を確認していたが、本児の転倒し瞬間はいなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	各クラスの担任はクラスの園児を誘導していた。他の職員は他児の対応(介助を要する子どもも、手をつないでの誘導)や、最後からを列守りを行っていた。	本児の万が一ではないことを保護者から聞いていて、すぐに避難訓練開始の時間が来て、担任に連絡ができずに避難訓練を実施してしまった。「お・は・し・ら・ま・い・も」の約束を徹底できるようにする。さらに、「お・しゃ・べ・り・な・い・も」の約束が徹底十分だった。まで階段、踊り場で守り十分だった。	体全員で保護者から聞いたお・は・し・ら・ま・い・も」の約束を徹底できるようにする。階段や踊り場は、必ず教師が見守り、転倒等の対応ができるようにする。階段を登るときは一列でゆっくり登る。	
2057	平成30年6月29日	1.認可	5.幼稚園	5	7.午後	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	47								14	13	16.4歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯の脱臼の疑い、歯根破折	5.他児から危害を加えられたもの	1.あり	2.不定期に実施	1	2.基準配置	研修以外にヒヤリハット事項について毎週職員会議で話し合ったり、自己チェックリスト、事故予防に関する職員づけを試みているが、進級後1ヶ月程であったりからの子どもの疲れ等を加味した想定の範囲が狭かった。	事故予防に対しての意識がより高まるよう、園内合の話し合いを綿密に行う。午後からの戸外遊び時の職員配置を見直し、増員する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12			3.個人活動中・見あり守り	午後の遊びの時間帯が、子ども達のみが疲れる時間帯だった。	午後から外自由遊びの時間帯の見直しをした。	1.いつもどおりの様子であった	特にいつもと変わらず、滑り台で遊んでいた。	2.対象児の近く象児でいた	滑り台の総合全体に見ていた。対象児が滑り台で遊ぶのを見ていたが手は扉かず、咄嗟に対象児のトラブルは止められなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	加配担当であり、加配対象児を中心に、担任とは違う場所を担当し見守っていた。	5月のまだ1ヶ月余り時であり、特に午後は子どもは疲れ逃がれ、突発的なトラブルが起こりやすくなっていた。	突発的な子どもトラブルに素早く対応できるように、戸外遊びの時間に、担任と加配担当教諭の話合いで職員を配置するようにした。また、午後からの戸外遊びの時間帯も他職員が増員できる時間帯に変更した。	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																													掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面								環境面			人的面										
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳									うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】															
2058	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	10	7.午後	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	30								1	1	17.5歳	2.女児	障がい児でB1の知的障がいの診断を受けている	2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左腕の2本のうち外側の骨は完全に折れ内側の骨は曲がっている状態	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施		5	2.基準配置		担任が抜ける時などは代わりが入るなど対策をたて、複数で保育を行う	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施			特になし	7.その他	保育士は準備がまだの子を手伝ったり、掃除の後片付けをしていた。	配慮が必要な子に背を向けてしまったので片づけの仕方や時間をずらしたりする。	1.いつもどおりの様子であった	普段からつま先立ちで歩いたり、両手で耳をふさいで歩いたりする。	4.対象児の動きを見ていなかった	降園準備中で対象児以外の手伝いをしたり、掃除の後片付けで対象児に背を向けてしまった。					降園準備のしかたや、部屋の掃除の仕方、時間をずらしたりする。また、作業中も子どもから目を離さないようにする。	
2059	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	120	8	14	19	21	22	22	7	8	25	25	17.5歳	1.男児	乳児期より、歩行時に足を内側に巻き込む癖があった。転びやすかった。	1.屋外活動中	1.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	左足甲・親指の骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1回以上	1.基準以上配置	競技の中で急いで移動する場面での転倒であった。縄跳びの縄をたたみながらの移動の指示をしていたが、たたんでからの移動したほうが、落ち着いて移動ができたかもしれない。疼痛はあるものの発赤・腫脹がなかったため行動制限しなかったが、安静を促したほうがよかった。本児の特性(言葉で状況説明をするのが苦手で、今回も本児からの発信はなく、「痛い」と聞くと「痛い」と言う「大	それぞれの園児の特性を考慮した対応を心がける。園児自身にも、自分の体の状態や痛みの程度、痛みの増減や程度などを伝える力も就学をみすえて指	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施		264	該当無し	1.集団活動中・見あり守り		該当無し	1.いつもどおりの様子であった	体調不良はなかった。	4.対象児の動きを見ていなかった	リハーサルが終了後、保育室に移動し園児は着替え等行っていた。看護師が各クラスにけが等ないか視診に回った際、担当がそれぞれ子どもたちに向けてけがをした人、どこかいたい人はないかと問いかけたところ、本児が「足が痛い」と看護師のもとへ歩行してきた。「いつ、どうして痛くなったの」の問いに「組体操のなわとびのときやった」と答。看護師は本児が大縄跳	2.担当者・対象児のを動きを見ていなかった	翌日、本児の骨折の連絡を受け、担当、他の職員に本児の動きや様子を再確認するも、骨折につながるような明確な動きが不明であった。ビデオ撮影したリハーサルの様子を確認すると、組体操中、縄跳びを置き移動隊形移動中に、本児が自分位置の立ち位置の間違いに気付き、所定の位置に移動する際、地面につまずき足をひねる姿が	本児は、乳児期より歩行時に足を内側に巻きせ側に込むくありすかった。動きが活発で、静止することが苦手であった。そのため、痛みおして動を活発にしてしまった。転んだ時勢いも、あまって込転がり様子あまり	担当職員、看護師が本児の様子をもっと注意深く観察し、丁寧に対応する。本児に安静をもっと促すべきであった。	

| No | 概要 | | | | | 発生時の施設・事業体制 | | | | | | | | | | | 事故にあった子どもの状況 | | | 事故状況 | | | | | | 事故発生の要因分析 | | | | | | | | | | |

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制										年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面						ハード面						環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】						理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2063	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	4	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	40							2	2	16.4歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	5.下肢(足・足指)	右第1中足骨骨折	2.自ら転倒・衝によるもの	2.なし	1.定期的に実施	12	2.基準配置	つま先立ちで歩いたため。	歩き方には、十分気をつけるように声かけをする。	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	つま先立ちで一人で歩いて怪我をしたので、特になし	歩き方の問題なので、特に改善なし	1.集団活動中・見守り	室内での活動が多かったため、、エネルギーを発散できなかった。	戸外活動を多く取り入れて、体を十分動かるようにする。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通り登園して、元気に過ごしていた。	2.対象児の近で対象児を見ていた	つま先立っているのをちをじっと傍でみていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	多児の対応をしていたので、見てなかった。		危険な歩き方をしないように指導を行う。	
2064	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	7	1.朝(始業～午前10時頃)	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	40							2	2	16.4歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷		5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	下口唇挫創	2.自ら転倒・衝によるもの	2.なし	1.定期的に実施	12	2.基準配置		遊ぶ時の机の配置や遊ぶ場所の確保を行うよう指導した。	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	クラスの人数が多く、机や椅子が多かった。	遊ぶときは、机や椅子を寄せて空間を広くと 席を広くる。 立つ時は、椅子を入れる様に指導する。	1.集団活動中・守り	室内での活動が多かったため、、エネルギーを発散できなかった。	戸外活動を多く取り入れて、体を十分動かるようにする。	1.いつもどおりの様子であった		2.対象児の近で対象児を見ていた		2.担当者・対象児の動き見ていなかった			見守り人員を増やすよう改善。	
2065	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	1	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	5.4歳児クラス	40							2	2	16.4歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨顆上骨折	1.遊具等からの転落・落下	2.なし	1.定期的に実施		2.基準配置	雲ていから飛び降りたため。	雲ていから跳び降りないように指導をする。	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51		遊び方の問題なので、特に改善はなし。	1.集団活動中・見守りあ		遊び方の問題なので、特に改善はなし。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通りではあったが、慎てやすく落ち着かない性格である。	2.対象児の近で対象児を見ていた	雲ていの傍にはいたが、跳びおりるのを止めることができなかった。	2.担当者・対象児の動き見ていなかった	多児の対応をしていたので、見てなかった。		見守りの人員を各遊具ごとに配置する。	
2066	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	10	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	10	3	2	2	1	2		10	10	17.5歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	左鎖骨骨折	2.自ら転倒・衝によるもの	2.なし	1.定期的に実施	15	2.基準配置		ヒヤリハット記入記録の小石により園全体の認識として会議職員会議等で共通意識する。	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51	1.定期的に実施	51		今後も園庭の小石等を取り、目視等でも毎日点検安全対策を図る。	1.集団活動中・見守りあ	体力不足なので園での体幹遊びを取り入れる。	体力不足も含め、握足手や体幹を鍛える遊びをする。	1.いつもどおりの様子であった	リレーが好きで、運動会ごっこをしていた。	3.対象児から離れたところで対象児をていた	見守っていたので、直ぐ寄に駆け寄り様子をみた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	他の年齢の低い園児もいたので、本見ていなかった。	監視の目が少なかった。時差出勤時間なので保育士も少なかった。	各クラスの保育後での戸外遊び中だったので、保育士を戸外遊び見守り増員。	
2067	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	61			19	12	30		4	4	16.4歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		4.創傷(切創・裂創等)	1.頭部	前額部割創、左足関節挫創、右母趾挫創	2.自ら転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	12	1.基準以上配置		特に危険と思われる箇所には保育士が必ず付くこと。その場を離れると、声掛け合うことの再確認をする。	1.定期的に実施	開園時は毎日	1.定期的に実施	開園時は毎日	1.定期的に実施	開園時は毎日		トンネル山の形状を変え走り難い環境を作った。	1.集団活動中・見守りあ		友だちと落ち着いて遊べる作る環境を作る	1.いつもどおりの様子であった	興奮し衝動的にだした	2.対象児の近で対象児を見ていた	トンネル山のそばで対象児と他の園児を見ており、転倒しそうすぐに駆け寄った。間に合わなかった。	2.担当者・対象児の動き見ていなかった	他の職員の園児の戸外あそびを見ていた。		トンネル山で遊ぶ際は走らないよう指導を徹底した	
2068	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	117		32	32	30	23		11	11	14.2歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		4.創傷(切創・裂創等)	2.顔面(口腔内含む)	顔面裂創	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	1	2.基準配置	走っていた子どもの姿へのその後起こりうる危険の予測不足。	外であっても通路では走らないことをその都度声掛けする。	2.不定期に実施	1～2	1.定期的に実施	毎日	1.定期的に実施	毎日	危険箇所への認識不足	怪我をした箇所と考えられる危険箇所へ安全マットを貼る。	3.個人活動中・見守りあ		各活動場所の子どもの人数に合った職員配置を考える。	1.いつもどおりの様子であった	戸外から室内へ他児と競争で感覚で戻っていた	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	2階の保育室、園庭とその中間であるホールに立ち、行き来する子どもたちを見守っていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	戸外、室内ともが選択してしているため、それぞれに分かれていた。		死角となっている場所を検討し、見守りで立つ、職員の場所を見直す。	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																															掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰		負傷			事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面											
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡					マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】															
2069	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	3.昼食時・おやつ時	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	96	11	14	16	17	14	24		24	18	15.3歳	1.男児		5.食事中(おやつ含む)	1.負傷		2.骨折	5.下肢(足・足指)	右第一趾骨骨折	8.その他	1.あり	1.定期的に実施		1.基準以上配置	特記事項なし	特記事項なし	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施		特記事項なし	特記事項なし	2.集団活動中・子ども達のみ	子どもたちのトラブルになった際に保育士が把握できておらず、未然に防ぐ事が出来なかった。	全体を見る職員・子どもにつく職員等、出して配置を確認していく	1.いつもどおりの様子であった	体調の変化も無くいつも通りではあったが、日常的に給食前の時間には気持ちが高まる	4.対象児の動きをていなかった	本児が保育室で給食の準備をしている姿は把握出来ていた。その後トラブルになった事は把握が出来ていなかった。	2.担当者・対象児動きを見てなかった	本児が保育室で給食の準備をしていることは分かっていたが、その後配膳や自分の持ち場だけに目が行ってしまい、全体を見る職員がいなかった	保育者間出合い、配置の確認を常に行うことが出来ていなかった	子ども同士方の関わり方を普段から把握し、職員間で情報を共有しておく	
2070	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	1.朝(始業～午前10時頃)	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	11			5	6				4	4	16.4歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	右鎖骨骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施		2.基準配置	様々な行動をすることを想定しておくべきだった。	全職員に事故のことを周知し、今後気を付ける点などを再確認する。	1.定期的に実施	52	1.定期的に実施	1	2.不定期に実施			自損事故の為	1.集団活動中・守り		自損事故のため	1.いつもどおりの様子であった	踊りの自分の立ち位置に立っていた。	4.対象児の動き見ていなかった	隊形移動の確認中で、他児の方向を見ていた。	1.担当者・対象児動きを見てた(至近距離にいた)	隊形移動中の確認中で、対象児をいた。	様々な行動をすることを想定しておくべきだった。	短い時間でも、座らせ安全策をとる。	
2071	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	80		10	17	19	17	17		8	7	15.3歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	右鎖骨骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施		12	1.基準以上配置	子どもから目を離にしたけがが発生している。	まずは目を離さないこと、そして立ち位置について再確認を行う。	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施			点検の更なる徹底	1.集団活動中・見あ守り	子ども目を離した際にけがが発生している。	まずは目なさないこと、そして立ち位置に再確認を行う。	1.いつもどおりの様子であった		4.対象児の動きをていた		2.担当者・対象児動きていなかった		子ども目を離したけがが発生している。	まずは目を離さないこと、そして立ち位置について再確認を行う。	
2072	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	30								2	2	18.6歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右尺骨近位端骨折右橈骨遠位端骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施		2.基準配置	学研教室から戻ってきてすぐの気持ちに、留意していなかった。	普段より気持ちの高揚が行動に現れやすいため、細かい情の変化に気付き、より安全な見守りをするよう職員間で連携をとる。	1.定期的に実施	1回/月	1.定期的に実施	1回/週	1.定期的に実施	毎日	子どもの気持ちに対する危険予測ができる。	子どもの動きを事前に予測し、落ち着いて遊べる環境（玩具）を整えておく。	1.集団活動中・守り	男女の活動の違い予測し、分けて遊んでいたが不十分であった。	保育室という慣れた空間で、子ども達もケガについての意識が薄くなっている為常に見守り、危険を予測し知らせる。	1.つもどおりの様子であった	普段通りであったが、学研教室から戻って来た後だった為、楽しさで気持ちが高揚していたかもしれない。	2.対象児の近で対象児を見ていた	室内を走らないように声をかけていたが、少し離れていた為間に合わなかった。	2.担当者・対象児動きを見てなかった	おもちゃ遊びを見守る職員と、運動会の為オルガン指導する職員に役割分担していた。	子どものの特徴・その心配の時の情への配慮なかった。	室内遊びの諸注意をそのまま伝えるなど、細かい配慮を怠らない。	
2073	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	6.5歳以上児クラス	19								4	3	17.5歳	2.女児	特になし	2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右第５中手骨骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的実施		12	1.基準以上配置	特になし	特になし	1.定期的に実施	48	1.定期的に実施	毎日	1.定期的に実施	毎日	特になし	特になし	1.集団活動中・見あ守り	助走距離が十分に取れていなかった。	運動遊び運動用具は、助走が十分に取れる場所に配置する。	1.いつもどおりの様子であった	助走距離が短かった為、手タイミングがあわず、右手に体重がかかったまま跳び箱を跳んでしまった。	2.対象児の近で対象児を見ていた	普段の運動遊びでは水児が跳び箱を跳べる為、跳び箱の側で見守っていた。	2.担当者・対象児動きを見てなかった	跳び箱の他に鉄棒と運動マットの補助をしていた為、対象児を見ていなかった。	助走距離について配慮が足りなかった。	運動遊びを行う場所の広さを十分に考え、活動の計画を立てる。	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面						ハード面								環境面			人的面									
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2074	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	5	1.朝(始業～午前10時頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	100	10	18	13	21	20	18		19	19	16.4歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右小指骨折	3.子ども同士衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	2,3	2.基準配置		事故発生の経過等を職員一同で共通理解し、次の事故防止に努める	1.定期的に実施	随時	1.定期的に実施	随時	1.定期的に実施	毎日		遊具・玩具等については現状どおり点検確認をする	1.集団活動中・見守り	子どもの遊びや活動を遮るのではなく、遊び方や使い方をルールとして子どもに示すことができていなかった。	体の使い方を日常生活や遊びの中でしっかり習得できるよう援助すること。	1.いつもどおりの子であった	いつもどおりの活気であった	2.対象至近で対象児を見ていた	走っていることは視野に入れていたが、転倒もなかったので、怪我に気づかなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	走っていることは視野に入れていたが、転倒もなかったので、すぐに怪我に気づかなかった。		子どもの動きをよく注意してみること。	
2075	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	5.4歳児クラス	22								4	3	16.4歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷		5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	上前歯打撲	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	6	1.基準以上配置		移動時は落ち着くことを、さらに指導する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	必要適宜		運動用具から運動用具に至る動線は広く設定していたが、目配りできる範囲にできるか再度見直しをする。	1.集団活動中・見守り		運動用具から運動用具に至る動線は広く設定していたが、目配りできる範囲にできるか再度見直しをする。	1.いつもどおりの子であった	平常通り登園。体操教室中も普通。	4.対象児の動きを見ていなかった	運動用具は着いていたが、用具から用具への異動には個別には見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	運動用具は着いていたが、用具から用具への異動には個別には見ていなかった。1人は全体を見ていたものの丁度本児の動きは見ていなかった。		事前に移動する順路他指導しており、本児も守っていたが、さらに各職員が広範囲まで留意する。	
2076	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	11	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	6.5歳以上児クラス	6								1	1	17.5歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	前歯打撲	1.遊具等の転落・落下	2.なし	2.不定期実施	1	1.基準以上配置	怪我をした園児の真横（すぐ側）に保育者が付いていなかった事が要因ら考えれる。	出来るだけ、職員が側に付いて活動する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	鉄棒で遊んでいたが、3箇所ある鉄棒を全て使って遊ぶ為、保育者が、すぐ側に付けない環境が出来てしまっていた。	鉄棒での危険な遊びは危険な為、保育者が1名の場合、1箇所のみ使用し、そうする事で、すぐ側に付けていた。	1.集団活動中・見守り	保育者の合同に合わせた形で活動する必要があった。	保育者の合同に合わせた形で活動する必要があった。	1.いつもどおりの様子であった	いつもとすずわらず元気にすごしていた。	2.対象至近で対象児を見ていた	(具体的内容記載欄)保育者が見守る中で、鉄棒で遊んでいたが、誤って、口（上顎前歯）を鉄棒でしまった。保育者は対象児の対象児の近くに居すぐ側にいておらず、未然に防げなかった。結果、もっと至近距離で保育していれば防げたのかもしれない。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の保育者は、対象児以外のクラスの園児を保育していた為、対象児の様子は未確認。	対象児のクラスは、保育者1名で保育しており、対象児は、至近距離での保育が出来ていなかった。	保育者の人員を増やすという対応は難しい為、活動の内容や活動時の保育者の配置等を改善する。	
2077	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	3.2歳児クラス	45								8	8	14.2歳	2.女児	なし	1.屋外活動中	1.負傷		4.創傷(切創・裂創等)	2.顔面(口腔内含む)	前額部挫創	4.玩具・遊具等施設・設備の安全上の不備によるもの	1.あり	1.定期的に実施	12	2.基準配置	職員共通理解での点検のやり方や、ヒヤリハットの受け止め方が甘かった	研修の内容を深める見直しし、研修方一のあり方をもう一度確認する	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	安全点検の細かいところまでのチェックが出来ていなかった。点検する立場での緊張感が不足していた。	すぐに看板を撤去する(90cm×90cm 厚み5cm縁1cm 4.6kg)専門業者に定期的に点検をにお願いする	1.集団活動中・見守り	運動会の練習に参加しながら日除で見ていた。看板が落ちるとは、考え方られず危険の配慮が足りなかった	待機場所が安全な場所か、確認を、日頃の安全チェックをしっかりやっていく	1.いつもどおりの様子であった	運動会の練習をし、日除にて待機しクラスの練習を座って見学していた	2.対象至近で対象児を見ていた	運動会の練習後、クラスの園児職員で日除にさせ危険のないよう声をかけ合いながらクラスの園児の様子を見守っていた	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	1．2．3．4．5歳児の担任は自分のクラスの練習をし、全員園庭内集団で見守っていた	看板の落下と同時に気付いたが落下し、看板をかすり、看板が落下していたところをつかまえた。	周りの環境を確認し、いろんな危険を予想する事を書き出し、マニュアルにする	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由	具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか				
2078	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	1.朝(始業～午前10時頃)	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	28			17		11			2	2	18.6歳	2.女児	特になし	2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首骨折	2.自ら転倒・衝突によるもの	2.なし	2.不定期に実施	6～	2.基準配置	研修の回数が少なかった	今回の事例やクラスでおこったケガなどをもとに対策や環境の見直し、改善すべき点などを意見出し合う	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	床がフローリングだった	クッション材の購入を考える	3.個人活動中・見守りあり	異年齢児が集まるので次第に人数が増える	紙芝居や絵本を使って子どもたちを集中させる	1.いつもどおりの様子であった	他の場所に移動したかった	2.対象至児の近く対象児を見ていた	77.52㎡の保育室で3歳児11名5歳児18名の計29名を2名の保育士が見守っていた	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	早出の時間帯の為担当以外のその部屋に職員はいなかった	早出の時間帯時間で保育士が担任以外だったため 年齢の低い3歳児のほうに気をとられていた	走らないように声掛けを多くする	
2079	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	11	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	11	2	2	2	2	1			15	12	17.5歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右橈骨頸部骨折・右尺骨近位端骨折	1.遊具等から転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	数回	2.基準配置	職員配置には問題はなかった。	鉄棒をする際には、保育士が近く見守ることを改めて、職員に周知した。	2.不定期に実施	数回	1.定期的に実施		1.定期的に実施	12	鉄棒から手を滑らせてした際に、右腕を下にしてが上に乗ってしまった。	鉄棒の下マットを敷く又、地面を均し着地点を柔らかにする。	クラスの他の子が、集団遊びを行っていたため、本児のすぐ側に保育士が居なかった。	鉄棒や固定遊具で遊ぶ際には、保育士がその近くで見守る。	1.いつもどおりの様子であった	クラスの他の子が集団遊びを始めたが、本児は一人鉄棒遊びを始めた。	3.対象から離れたところで対象児を見ていた	おやつ後、本クラスの子達を戻して連れて外へ出た。すぐに、集団遊びを始めたので、その場に付き添い声掛けをしていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	家庭支援保育士や他のクラスの職員も、他クラス（4歳児）を連れて戻すようにしていた。	保育士が側について居なかったことに、未だ然に防ぐことができなかったと思われる。	鉄棒をする際には、保育士が近く態勢を取るようにする。	
2080	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	18			6	5	7			8	7	17.5歳	1.男児	なし	1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右腕骨折	1.遊具等から転落・落下	1.あり	1.定期的に実施	6	2.基準配置	本児自身でこはあそぶことに慣れていたので、注意を怠ったり勢いをつけすぎたりしたことも考えられる。	慣れている遊具で遊ぶ際にも、慌てず落ち着いて遊ぶよう、注意喚起していく。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施		1.定期的に実施	12	鉄棒はいつもと同態で、天気も良く、気候も良かった。他に気になる物があって気が逸れたのかもしれない。	鉄棒は落下の恐れがある為、十分気をつけて、掛け、遊び方を繰り返し知らせていく必要がある。	1.集団活動中・見守りあり	鉄棒の前をしが手を回りている際、手が手から滑って棒下落してしまった。	鉄棒をする時は、しっかり握り足が着地面くまで手を放さない十分気をつけるよう繰り返し話すと共に、鉄棒は落下の危険があるため、その子に応じ補助をようにはしているが、鉄棒が出来る子でも慣れくると気遊び方が激しくなったり子どもの為、子どもが自身が気をつけるような声掛けを工夫していかなければいけないと思う。	1.いつもどおりの様子であった	自分の使った玩具を片付けた後、他のお友達は部屋へ入っていたが、本児が入室しない為、入室する保育士に声掛けられ、分かっているようだったが、鉄棒がしたくて、前回りを一度してから入室しようと思っていた様子。	2.対象至児の近く対象児を見ていた	事故当時は、3,4,5歳児が18名おり、遊び終えた子供達と一緒に入室する保育士が1名と、まだ遊びに区切りがついていない子どもを入室にうまく誘いながら、残っている玩具片付けを保育士が1名した。園庭にはその時5名の子どもがいて、その一人中の一人が本児である。本児は、普段鉄棒を上手にしており、傍に行き補助をする必要が無いと判断した為、直ぐ傍にはいなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	入室して他の供達と一緒に部屋へ帰ろうとしていた。	鉄棒をする際は、危険が有る落下の為、繰り返し、傍に着士は手を放さないようにすると共に、鉄棒は落下の危険があるため、その補助を行うようにはしているが、鉄棒が出来る子でも慣れてくると気遊び方が激しくなったりする為、子どもが自身が気をつけるような声掛けを工夫していかなければいけないと思う。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																						掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面						環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
																						死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】						理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか				
2081	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	31			11	10	10			40	30	17.5歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	3.体幹(首・胸部・部・臀部)	左鎖骨骨折	2.自転・衝突による倒れ	1.あり	1.定期的に実施	6	2.基準配置	雨上がりは遊具が濡れていたり、足元が滑りやすいため、遊具を拭いたり、走ると滑りやすいことを声掛けしし、いつも以上にて注意みてい く。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	運動も良くできる。他に固定遊具を使っての遊具を避けながらあまり走ると思いたが、速と上手く遊ばれない事もあるので、速度等、状況を見て止める等、遊びの設定を考える必要がある。	引き続き点検を行う。又、事前の計画・配慮を再度確認する。	1.集団活動中・見守り	一杯走ると他児とぶつかったり、遊具突進すると衝突するので、回りを見て走るように声掛けはしている。この日は雨の日は上がりとこと言うこと常に言って、保育士は遊具を拭く保育士と子どもを見る保育士という。	屋上に上がる前に、一度子ども達を上がるように話しをしてから、職員は、職員で危機管理について、再確認する。	1.いつもどおりの子であった	変わりなく登園し、運動は好きなので、午前中の横割りでの活動（運動あそび）は、特に張り切って行った。その後、自分クラスへ戻り、クラスのへ担当クラスの友だちと給食の準備が出来るまでの間、屋上へ行き遊んでいる。	2.対象児の至近で対象児見てい た	子ども達を見守れる場所で子ども達の固定遊具で遊んで子の補助をしていた。	2.担当者・対象児の動き見てなかった	担任はそ一人でみた。一人は、同じクラスの障がいの子と、部屋にいた。もう	運動会が近く、本児をはじめ子ども達は運動会で気持ちが高ぶっていた。又、なる事が来るなど、自信ちあふれて動き益になった時の出来事だ。色んが出よう、高ぶり、活々活発な事の	屋上に上がる前に、一度子ども達に話しをしてから上がる様にするなど、職員で危機管理について、再確認する。	
2082	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	7	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	7.異年齢構成	12			8	3	1			3	3	15.3歳	2.女児	特になし	1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	3.体幹(首・胸部・部・臀部)	左鎖骨骨折	2.自転・衝突による倒れ	1.あり	2.不定期に実施		1.基準以上配置	充分な人員配置でも油断せずに観察する。事故がなくても定期的に事故防止及び発生事故発生時の対応について確認する。	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施		平坦な地面で、使用前の確認でも石や突起物は見当たらなかった。	散歩先到着時点で毎回危険個所の点検をしているが、今後も欠かさない。異常を発見した場合は、すぐ保育者に全員が共有し対応する。	1.集団活動中・見守り		・遊びに入る前に、約束事だけでなく準備（体操や身体運動）を使う遊び）を行う。・転びそうになった時に自分の手で体をかばうことができるよう、日常的に体を使う遊び入れていく。	1.いつもどおりの子であった		3.対象児から離れたところで対象児見てい	楽しそうに走っており、転倒すると予測しなかった。	1.担当者・対象児の動き見てた(至近距離にいた)	楽しそう走っており、転倒すると予測しなかった。	3歳児の担任の代替でフリーの主任保育士が加わった。経験は、それ13年目、7年目、1年目の保育士だった。	日常的に保育で関わっている5歳児担任であったりまはあるが、園外保育ではいつも以上に緊張感を持ちことを忘れない。	
2083	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	11	7.午後	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	33			15	18				2	2	17.5歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手中指骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	12	1.基準以上配置	・保育士の配置については、子どものなど慮の都度臨機応変に対応する。・子ども同士の仲裁などで、場合は、目を離す別の保育士に声をかけてもらうなどし、常に子どもの動きを見守る。・子どもの遊び	2.不定期に実施	1	1.定期的に実施	1	2.不定期に実施	12		午睡前は、落ち着いた遊びを提供し、保育室が使えない時はホールで座って遊ぶ玩具	3.個人活動中・見守り		・怪我をした園児は、安静に保護者のお迎えを待つよう配慮する。・怪我があったことをお集まり（朝の会）で知らせ、クラスで	1.いつもどおりの様子であった	いつも通りに、友だちと戦いごっこをしていた。	4.対象児の動きを見ていなかった	他児のトラブルの対応していたためなかった。	2.担当者・対象児の動きを見てなかった	全体的に注意見ていて、戦いごっことはわかったが、怪我をした	いつもし遊いているので、特に留意ずに、全体見て	・遊びに入る前にはやるなどと安全面に考慮することを子どもたちと確認していく。・保育中は子どもの様子がわかるような場所に移動し、危険な遊びに気づけるようめられるようにする。・もし怪我などあった場合はこれまで以上に園児や患部の様子をこまめに見ていき、経過観	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面							環境面			人的面									
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】									理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
																												ひを様子を見て、時には介入し安全に遊ぶためのルールを伝えるなど再発防止に努める。・様子を見て危険な遊びになる可能性がある場合には、違う遊びに誘って遊びを変える。													で遊ぶように。													察し記録して保護者に伝える。園児の様子によっては、保護者に電話連絡をし、病院に保育士が連れて行く。・園児の怪我の伝言を他の保育士に依頼する時は、その園児の怪我の様子を実際に見てもらい、経過観察も依頼する。	
2084	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	1	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	7.異年齢構成	10			3	3	4			1		1	17.5歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右腕肘関節骨折（全治１ヵ月）	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置		事故発生時の対応についてマニュアルの読み合わせを年１回しているが、マニュアルどおりにはいかない事例を想定した具体的な研修も必要である。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	48		施設内外の点検時に、保育室、ホールなどの床が滑りやすくなってなく突起物がないかなども注意する。	3.個人活動中・見守りあり		活動を見守り、状況に応じて声かけを行う。	3.いつもより活発で活動的であった(理由を記載)	年末年始の休みもあり、多少はしゃいでいた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	ホールの端の方から走ってくる本児を反対側から見ていた。	2.担当者・対象児の動きをていねい見なかった	事務室・未満児保育室にそれぞれ分かれたので、対象児を見ていなかった。	年末年始の休みだけで、だちとの再会に本児も多少はしゃいでいたように思われる。３歳以上１０名が登園していたが、しかし合同保育を保名保育士１名が保育していた。いつもと違う保育環境の際は、より一層子どもの行動に注意を払はなければいけなかった。	休み明けの子ども達の行動に十分注意をこと。また、危険な行動を予測し、保育士の配置をすること。	
2085	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	9	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	48		17		31				5		5	17.5歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷		6.その他	4.上肢(腕・手・手指)	左腕肘横ひび	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期実施		2	1.基準以上配置		１人担任のクラスは、外遊びのときは、フリーの職員が一緒出て、外に見守る。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1		特になし	3.個人活動中・見守り	お帰り間際まで園庭で遊ばせていて園児も慌ててて	お帰り間際まで園庭で遊ばせず落ち着いて行動できるように配慮する。	1.いつもお様子であった	園庭から室内に入ろうとする時に転ろうとするんだ。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	園庭で子ども達といたが、転んだところは見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	２歳児クラスの職員が園庭にいたが、２歳児と活動ていた。	そばにいるにもかかわらずかなった。	お帰り間際まで園庭で遊ばせず、落ち着いて行動できるようにする。また、複数の職員が見守れるよう配慮する。	
2086	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	8	7.午後	1.施設敷地内(室	7.異年齢構成	7			3	4				1		1	17.5歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		2.骨折	4.上肢(腕・手・	右中指基節骨骨折	2.自らの転倒・衝	1.あり	2.不定期に実		4	1.基準以上配		保育者が子どもは意に転倒する事を想定していなかったので、その意識を必要があった。また子どもの自主性を尊重しつつも環境を戻す手伝う体制を整え、落ち着いて活	2.不定期に実施	約6	2.不定期に実施	約6	2.不定期に実施	12		環境を戻す手伝いをする場合は、上履きを履いてから行うように保育者が促しているが、当日、本人が履いていたかどうかわからない状況である。その	靴下のまま棚を戻そうとした可能性もあるので、上履きを履いているか必ず確認する。棚板を押すのではなく	1.集団活動中・見	当日床が濡れていた、つまずく段差があった等はなかったが、棚板を押す力の加減によっては転倒することも考えられるので、子どもの自主性を尊重しつつも、落ち	周りに転倒を誘発する要因がなかったが、子どもの力を考えて子どもを量を子ども二人（一人は年長児、一人は年中児）で作業を行う場合力方ンバにのかけがアンスに	1.いつもどおりの様	普段から保育者の手伝いを好む児童で、当日も変わら	2.対象児の至近で対象児	寝ていた子どもたちを起こして、ほとんどの児童は室内から出ていた。その子どもた	2.担当者・対象児の動きを	年少児を中心に寝ている児童を起こす保育室おやつ保育者、食堂での配膳等に関わる保育者、おやつを	保育者が転本児が転倒する事を想定する事が出来なかった。	保育者は本児が転倒する事を想定できるようにしていく。子どもの体調ためにや体力など一人ひとりの状況を把握しておくことが必要である。ま	

No	概要					発生時の施設・事業体制										事故にあった子どもの状況			事故状況								事故発生の要因分析																								掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰						事故誘因	ソフト面						ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷						マニュアルの有無	事故予防研修	実施頻度【回/年】	職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検	実施頻度【回/年】	遊具の安全点検	実施頻度【回/年】	玩具の安全点検	実施頻度【回/年】	その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き	理由	担当職員の動き	具体的に何をしていたか	他の職員の動き	具体的に何をしていたか	その他要因・分析、特記事項	改善策	
	07月29日		月/日			内)	時/人											歳	人		発生時	時			手指)	歳/月/時/分	突によるもの																								
2087	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	12	2.午前中	3.施設敷地外(園外・保育先・公園等)	7.異年齢構成	67			24	26	17			7		7	17.5歳	2.女児	・集中力が長く続かず、落ち着かない状況であることが度々ある。母からは怪我をしても気がつかないところがあると聞いている。	1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	5.下肢(足・足指)	左足関節外果骨折	8.その他	1.あり	1.定期的に実施		2.基準配置		職員間で、子どもの見守りとその情報共有について確認し周知する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	毎日	1.定期的に実施	毎日		園内外問わず、保育中の安全確認は引き続き行っていく。	1.集団活動中・見守りあり		保育士の立ち位置を確認しながら、子どもの状況を細かく見守る。	1.いつもどおりの様子であった	散歩中は固定遊具をメインに、友達と一緒に体を動かして遊ぶ。	2.対象児の至近で対象児を見ていた	散歩先の公園、及びその行き帰りでは、園外ということもあり普段以上に子どもの動向には気をつけて見守っていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	散歩先の公園、及びその行き帰りでは、園外ということもあり普段以上に子どもの動向には気をつけて見守っていた。		子どもの状況を細かく見守り、職員間で情報共有を行う。	
2088	平成30年6月29日	1.認可	6.認可保育所	5	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	44			16	13	15			5		5	17.5歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷		2.骨折	5.下肢(足・足指)	剥離骨折	8.その他	1.あり	2.不定期に実施		2.基準配置		特になし	2.不定期に実施	15	1.定期的に実施		2.不定期に実施		15		特になし	1.集団活動中・見守りあり		特になし	1.いつもどおりの様子であった	戸外でいつもと変くて数名わりなく元気に走り遊んでいた。	2.対象児の至近で対象児を見ていた	居残り保育中、近くで数名を見守っていたが対象児がこけたときには救えなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の子ども達を他方に分かれ見守りも遊んでいた。		今まで以上に職員の配置に気を配る。	
2089	平成30年6月29日	1.認可	7.小規模保育事業	8	1.朝(始業～午前10時頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	7.異年齢構成	15	4	5	6					8		4	14.2歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷		3.火傷	5.下肢(足・足指)	2度以上熱傷	8.その他	1.あり	2.不定期に実施		2.基準配置	気温が高いため、園外活動を絵の具遊びに変更し、園児の身体を水洗いする事を決め、水温が低かったため、急遽温水の準備を行った。保育計画の変更を施設長が把握していなかった。クラス（年齢	事故防止マニュアルの再構築を行う。保育計画の変更を施設長がチェックする。クラスごと、横の連携0歳・1歳・2歳で連携を取り、園	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	園活動に使用していないため、給湯設備がベランダを園活動変更により使用した。	ベランダは、園活は使用しない。	1.集団活動中・見守りあり	水温を上げる間、園児を同じ場所で待たせていた。	集団活動中の職員配置と職務の徹底、職員間の声かけを実施する。	1.いつもどおりの様子であった	園児2人がタライの近くにいた。	2.対象児の近で対象児を見ていた	通常の業務、担当をクラスていた。タライの近くにいた園児が、イの近くに園児2名について危険だと思わず、止めなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	園児が近くにいたが、電気ポットからお湯をこうしてそそぐとした。	電気ポットを使って水温調節をしようとしたが、のフタが外れることを予測できなかった。	役割分担を明確にし、安全確保をする。調理室以外での電気ポットの使用禁止、温水を使用の場合は、給湯の設備がある調理室で温度調整した温水を使用	

| No | 概要 | | | | | 発生時の施設・事業体制 | | | | | | | | | | 事故にあった子どもの状況 | | | 事故状況 | | | | | | | 事故発生の要因分析 | | | | | | | | | |

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
																						死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】								理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2094	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	37								6	5	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	5.下肢(足・足指)	—	1.あり	1.定期的に実施	3	1.基準以上配置	対象児が転んだときを見ていなかった。日頃から成長痛を訴えていたので、痛みをそのせいかもしれないと思った。その後スキーのクラスを落としたが子どもの性格からプライドで痛いと言っていたので思った。	子どもとの発する「痛い」という気持ちを先入観を持たず受け止める。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	—	—	1.集団活動中・見あり守り	スキー遠足に参加した37名の児童のうち、初心者が22名いたそちらに支援員を多く配置してしまった。	支援員の立ち位置をもう少考え、子たちとえ逢がスキー経験者でも人数を配置する。	1.いつもどおりの子であった	成長痛があったものの普段通りにしていた	3.対象児離れたところで対象児を見ていた	経験者クラスが15名いたので全体をためるために離れたところで見たいった	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	スキー経験者と初心者の場所が離れていたので見ていなかった。	普段から成長痛があったため、転ぶときにそこを守ってこたえ返をを捻ってしまった。	児童の体調面に不安がある場合のある場合は、児童の病状や悪化などやケガのリスクがあるは、児童について保護者と参加について参加に充分相談し対応することとする。	
2095	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	75								7	4	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左肘骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	2.なし	2.不定期に実施	6	1.基準以上配置	—	ミーティングで校庭の状況を把握することや、声かけすることを指導員１人が意識をすることを話し合う	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	雨が降った後で、完全に土が乾いていなかった	冬場に雨が降った後は完全に乾いていない可能性があるので、十分に確認をする	1.集団活動中・見あり守り	指導員の見守りがなかった、児童たちがサッカーに熱くなりすぎてしまった	遊びに出声すかけを る前にけを	1.いつもどおりの子であった	サッカー中に転んだ	3.対象児離れたところで対象児を見ていた	サッカーしていて、離れた場所から見ていたので、目を守った	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の遊具や場所で遊ぐる児童の見守りをしていたため	—	遊びの中でも、声かけを頻繁に行う	
2096	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	87								7	2	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手小指骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	2	2.基準配置	—	怪我をした子どもへの適切な処置を支援員間で意識づける。							怪我が常ころ可能性がある為、子ども達に声掛け等で注意を促していく。	1.集団活動中・見あり守り	—	校庭遊びは児童が様々な所で遊んでいる為、適切な配置をして等の見守りで事故防止に努める。	1.いつもどおりの様子であった	普段と変わらず元気に校庭を駆け回っていた。	4.対象児の動きを見ていなかった	突き指をした時は見ていなかった。本児より痛みの報告を受けて冷やす措置をした。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他児の遊びに加わりながら子ども達の様子を見守っていた。	—	情報共有、危機管理の徹底。	
2097	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	30								5	2	19.7歳	1.男児		7.登園・降園中(来所・帰宅中)	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手中指骨折	8.その他	2.なし	3.未実施		1.基準以上配置	—	支援員等の配置は十分であり、ソフト面に改善策なし。	1.定期的に実施	2	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	2	事故が発生した外側のドアは重く、勢い良く閉まらなく閉まらなも、挟んだだけでケガをする可能性があった。	児童が多く入室する時間は開放しておく。	4.個人活動中・子どものみ	—	当該事故において育成支援の状況に問題がないため、改善策なし。	1.いつもどおりの様子であった	—	4.対象児の動きを見ていなかった	室内で、連絡帳の受け取りや手洗いの指導等、入室児童の対応をしていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	室内で、連絡帳の受け取りや手洗いの指導等、入室児童の対応をしていた。	—	第３学童保育室（同施設２階）の職員とも調整し、外側ドアについても見守るようにする。	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																								掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面								環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】													
2098	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	35								4		1	20.8歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左肘骨折	2.自転倒・衝によるもの	1.あり	3.未実施		2.基準配置	—	職員会議などでマニュアルを定期的に確認するとともに、様々な事故を想定して具体的な職員の動きを話し合う。	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	1.定期的に実施	365	事故の起部屋きた部屋は間口が狭い	昼食の準備の時間帯であり、支援員１名は配膳の準備に入っていた。昼食のために２階生活スペースでもた自由に遊んでおり、補助員１名、障がい児担当２名が見守っていた。	1.集団活動中・見あり守り	—	室内が混雑した状況では、児童が分散して遊ようにできるように声掛けをするとも に、入り口付近で遊んでいる児童に場所を変えるように声掛けする。	1.いつもどおりの様子であった	事故の起きた部屋の奥で遊んでいた友だちのもとに向かおうとしていた。	4.対象動児の動きを見ていたか	昼食の準備をしていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	隣の部屋で他児童と遊んでいた。	昼食の時間帯であり、子どもたちが見守りが手薄になっていた。	全体を見守る職員の配置をする。	
2099	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	52								7		2	23.11歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	左前歯の脱臼	2.自転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1.基準以上配置	施設の面積も十分にあり、遊ぶスペースもある、安心ってしきって面がまあります。	特に雨の日等は、玩具やカード、塗り絵といった遊ぶ内容、保育の環境を整えて、子どもの当ときあたるであったと思います。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	6	事故があった現場のフローリングは、滑りやすい長尺シートが施行されているため、マットやペットを使用し、安全性の確保をしていきたいと考えています。	事故があった現場のフローリングは、滑りやすい長尺シートが施行されているため、マットやペットを使用し、安全性の確保をしていきたいと考えています。	1.集団活動中・見あり守り	「走ると危ないから走りません」と声掛けを行っていますが、具体的な事故が起こらないような具体的な保育を行っていない、転倒事故が起こったと考えています。	言葉の指導だけではなく、実際にどうしたら、子どもが走らず、楽しみながら落ち着いてできるかをしっかりと計画し、保育をしっかりと計画し、保育に活かしていかなければなりません。保育見直しを行います。	1.いつもどおりの様子であった	かくれんぼ遊びをしながら、自由遊びをおこなっていた。しかし、次第に盛り上がってきて、結果的には走り回り、転倒してしまった。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	当日は、雨が降っており、全体の保育ができる、広いホールでの子どもたちの保育を行った。しかし、３０分ごろから、保護者のお迎えができたため、人員が足りなくなってしまった。	1.担当者・対象児の動きを見た(至近距離にいた)	近くに居て、当該児童に声掛けを行っていたのになぜ、事故を防げなかったの、自問自答しています。目を離した、他の児童を見ていた等、いろいろられますが、見ていなかったことを反省します	お迎えの時間の先生同士の声掛けが、引きでいなかったが、継ぎがいい面があります。シフトの部合、６０分ごろ時にあがるの先生がいるので、その前後は、特に発生するのではないかと注意を払うべきであった。	５時、６時の事故が起こりえる時間帯の人員配置を増やすことを考えています。また、担当しているクラスだけ見るのではなく、全体の職員が、保護者の対応をする人と、子どもを見る人り状況に応じて、連動するよう、声掛けを行がら子どもの遊びできるよう安全面を強化します	
2100	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	12	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	22								5		3	23.11歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	完全脱臼	8.その他	2.なし	1.定期的に実施	2～3	1.基準以上配置	日頃からヒヤッとしたり、ハットとする子どもを事故予防につなげられなかった。事故発生時の対応を支援員間で周知してあったのでかかな応が出来た。	子ども同士の遊びでは、特に力加減への安全に支援員は配慮する。事故発生時間により、受診受け入れ可能な医療機関への窓口を確認しておく。	1.定期的に実施	292	1.定期的に実施	292	1.定期的に実施	292	和室（狭い）空間での遊びの内容としては安全性に欠けていた。	児童が遊び・活動を行う場所の適切さと安全性を考え対応する。	1.集団活動中・見あり守り	狭い空間での遊び、安全確認が不十分であった。	特に遊び・活動を行う場所が事故につながる要因や状況になっていかどうか確認を行う。	1.いつもどおりの様子であった	低学年2人とすもうをしていた。本人はすもうをするときの力加減をしたのが、相手の低学年の子が、力加減を知らず、本気で立ち向かってきた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	低学年2人と高学年１人でもうをしていた。高学年はすもうをするときの力加減すの等知っていたので、うま低学年遊びのくらのそのでいかはないかと思い、見守りの範囲で遊び。　低学年は、まだ手加減を知らず、本気で比べることを読み取れなかった。	2.担当者・対象児の動きを見た(至近距離にいた)	和室で遊んでいることは、ていた。対象児童の「歯が抜けた！」に駆け寄る。処置する係、連絡係、他の子どもたちの係、分担する。保護者と医療機関へ連絡する。	時間の事迎え間出来た。落ち着いで備えて帰宅準備を行いなかった。お迎え	室内遊びの安全を児童と職員で共有・確認し、お迎えまでの時間の過ごし方を確認する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面						環境面				人的面							
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】				実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】									理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2101	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	16								11	5	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右第四中節骨骨幹部骨折	8.その他	1.あり	2.不定期に実施		3	1.基準以上配置	現地の自然環境を周知し、ちの子供たちの行動に常に注意をしておくことが必要。	職員体制や、事前に注意事項を子供たちとも確認すること。	1.定期的に実施		1	3.未実施		1.定期的に実施		10	園外での事故のため なし。	園外での事故のため なし。	1.集団活動中・見あ守り	園外という環境であったが、行き慣れた場所であったため注意を怠った。	子どもたちへ日々の言い伝えや、危険性を認識してもらえるよう心掛ける。	1.いつもおりの様子であった	担当職員の後ろで遊んでいた。	4.対象児の動きを見ていなかった	ほかの子どもたちを、事故発生時に現場を見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	学童内での児童の保育を行っていた。	児童全員の動きが把握できるように複数の職員で対応する、広く全体を見ておく必要があった。	複数体制をとる。	
2102	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	41								4	3	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右腕上腕部骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	遊具場の全体を見守る支援員を配置していなかった。	遊具場の全体を見守る支援員を配置し、危険に気付き声掛けをする。	1.定期的に実施		12	3.未実施		1.定期的に実施		12	特になし	危険個所の確認や児童への注意喚起の声掛けなど、日常的に行う。	1.集団活動中・見あ守り	腕の力が不十分だったか。	皆、同じように遊んでいても、学年や個人の体力によっては危険になることもある為、遊具では支援員が見守りを強化し、すぐに行動に移れるようにする。	1.いつもおりの様子であった	普段と変わらない様子で遊んでいた。	4.対象児の動きを見ていなかった	児童が落下後、周囲の児童が知らせに来たのを受け、怪我の状況を確認した。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	対象児以外の児童との遊び、及びを見守りを行っていた。	支援員及び補助員の人数に不足はなかったが、それぞれの児童との遊びに入り、全体を見守っている支援員がいなかった。	全体を見守る支援員を配置する。	
2103	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	7	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	77								7	3	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨顆上骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	遊具場、遊具の使い方が危険を伴う使用方法だったこと。	遊具場と遊具の正しい使用方法について、児童・支援員間で再確認を行う。	1.定期的に実施		12	3.未実施		1.定期的に実施		12	遊具の正しい使用方法についての認識不足。	遊具の使用で危険を感じることがあれば、その都度児童へ周知を行う。	3.個人活動中・見あ守り	遊具場の見守り支援員数の不足。	遊具場の支援員を増員する。	1.いつもおりの様子であった	いつも通りで、他の児童数名と楽しく遊んでいた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	遊具場の全体を把握するため、遊具場の端の対象児を視野に入れて見守りを行った。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	それぞれの担当場所にて見守りを行ったため、担当者・児の対象動きは把握していなかった。	遊具場で子どもの鬼ごっこを止めることができなかったこと。	遊具場で走り回ることが危険だと、児童・支援員間で周知を行う。	
2104	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	7	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	79								8	2	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	見守りの位置配置が悪く、調整済かけをしている最中の怪我	支援員一人一人の安全確保を児童に促す為のスキルアップ	1.定期的に実施		12	3.未実施		1.定期的に実施		12	—	設備等の不備は無かった	1.集団活動中・見あ守り	集団遊び中で他児童同士のケンカや遊びの見守り、通年に加児童に43名の夏季児童保育のもの必要だった為、支援員の見守りが手薄になりがちだった。	支援員自身のスキルアップ、又、児童の受入定員をこ設けると、支援員免許を取得している者による保育実施を徹底すること。	1.いつもおりの様子であった	他学年のお兄さん達のまねをしてころをいところ蟬をいから捕まえようとしまった。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	見守り方法を他支援員と確認やりをしいるで、児を視界に入れながら守った。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他集団のを見守りをていた。	—	うち合わせの為にそばを離れる際、他の場所を見守っている支援員をその場に配置するか、危険が無い状態に児童の安全を確保したところから見守る必要があった。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面					環境面			人的面									
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2105	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	7	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	39							3	1	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	足首の剥離骨折	3.子ども同士衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		2.基準配置	支援員1人でバスケットとサッカーで遊ぶ児童を見ていた。	1つの遊びに1人支援員がつくよう体制を考える。	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	—	使用していないため（特になし）	1.集団活動中・見守り	—	運動場でサッカーをしていたため（特になし）	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変わらずサッカーで遊んでいた	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	バスケット（3名）とサッカー（6名）をする児童両方を、バスケットとサッカーコートの間で見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	補助員1名は室内保育、もう1名は外で一輪車を見ていた。	1人の支援員が2つの遊びについていた	グループを1つにまとめて遊ばせる。	
2106	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	9	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	42							5	2	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施		2.基準配置		年に1回研修を行い、怪我や病気に対する危機管理を学んでいる。	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	いつも遊んでいる遊具の為、気を付けて遊ぶことが少なくなっていた。	何が起こるかわからない事を全支援員・補助員・児童に伝えていく必要がある。	1.集団活動中・見守りあり	その他の要因は特に考えずらい	特になし	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変わらない様子だった。	2.対象至対象児の近で対象児を見ていた	遊具の回りで対象児を含め数人で遊でいた。対象児が落下するは見えていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	運動場の離れた場所で別の児童と遊でいたため、見ていなかった。	2年生以上が下校してくる時間だった。補助員2名しか外に出れない状況だった。	職員が少ない時などは遊びの場所などの制限をすると感じた。	
2107	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	90							9	7	22.10歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右前腕骨骨折	2.自転倒・衝突による	1.あり	2.不定期に実施	数	2.基準配置	職員配置については、体育館に行くということで、多めに人数を配置し問題はなかった。	職員は、対応しながら児童をしらも周囲に目を配り、常に全体を見ることを徹底する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施		1.定期的に実施	12	遊びの予定表のワイトボードが小さく、遠くは見えない。	ホワイトボードのサイズを見直すとともに、予定の書き方やホワイトボードマーカーの太さ・色を変えるなどして、遠くからも見えるように配慮する。	1.集団活動中・守り	場所が体育館であり、走りやすく、またスピードも出やすい状況だった。	思いきり走れる場所・状況はあるが、ピーピー障害物などに気を付けるように適宜を声かけを行う。	1.いつもどおりの様子であった	体育館という場所で、ことができるスペースがあり、走って予定表を見に行った	2.対象至対象児の近で対象児を見ていた	一緒になって遊んだり、見守りして	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	それぞれ担当種の目標で、一緒になって遊んだり、見守りをしていた	体育館という場所を考慮し、危険なりそうなとる走る児童や物にぶつ可能性の声掛けはした。	放課後児童支援員が、体育館での危険予測を再度明確化・日常化し、もちろん、個々の行動に目を配る。	
2108	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	35							4	1	20.8歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手首骨骨折	2.自転倒・衝突による	2.なし	1.定期的に実施		2.基準配置	「事故予防マニュアル」の未整備	事故対応マニュアルの見直し。研修等への積極的な参加を心掛ける。	2.不定期に実施		2.不定期に実施		2.不定期に実施		—	安全点検の徹底が足りなかった。	指導員の共通理解として、安全管理のための意識向上に努める。	1.集団活動中・見守りあり	職員がポイントとにいたが、3人では遊び場所の範囲が広かった。	遊び場所の範囲を狭めるなど、職員が子ども全員が全員を把握できるようにする。	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変わらない乗り慣輪車乗っていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	対象児童車ってこと対象児が一輪に乗っていろを見ていた。しかし、対象児倒した他児転倒時は他児童トラブルに対応しためたため見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	児童が遊ぶポイントごとに職員配置をしているため、見ていなかった。	外遊びの支援の際の職員見守りでは十分ではなかった。	支援員が外遊びの際の危険性を再認識し、見守りつつ、起こりうる事故や怪我の予測などについて、適切に声掛けをしていく。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析								ハード面							環境面			人的面							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面																									
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他		うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修	実施頻度【回/年】	職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検	実施頻度【回/年】	遊具の安全点検	実施頻度【回/年】	玩具の安全点検	実施頻度【回/年】	その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き	理由	担当職員の動き	具体的に何をしていたか	他の職員の動き	具体的に何をしていたか	その他要因・分析、特記事項	改善策	
2109	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	16								2	2	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	腰椎分離症	1.あり	3.未実施		2.基準配置	複数の支援員で見守っているが、隅々まで目届いなく十分に行き届いていないこともある。	児童の外遊びを支援員が見守るときの配置を定期的に再確認し、支援員同士の声かけを増やす。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	30	鉄棒には問題はなかった。	特になし。	1.集団活動中・見あ守り	鉄棒で「コウモリ」をしているのはわかったが、遠くから見守っていた。	鉄棒遊びでは、極力手放しをしないよう普段の声掛けを行う。行為を見場つけた場合は、その場で十分な注意喚起を行う。	1.いつもお様子であった	いつもはサッカーをして遊でいるが、当日は五年生の児童から障害物競走をしようと誘われ、言われるままに鉄棒をした。	4.対象動児の見ていた	全体をまんべんなく見ていたが、対象児が落下する瞬間は、他の児童を見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	各クラブより1名ずつ計3名の支援員で全体の見守り施したが、当該児童の落下時は、全支援員の視線が他児童に向いていた。	児童からの「大縄をまわしてほしい」と頼まれた、「一緒に遊ぼう」と言われたことがあり、児童全員への目が届かないことがある。	児童の安全を最重視し、児童全体へ目が配れるよう、支援員の配置場所を再確認する。	
2110	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	24								4	2	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	前歯１本完全脱臼、１本破折、１本陥没	1.遊具等の転落・落下	2.なし	2.不定期に実施	2～3	1.基準以上配置	—	ジャングルジムで方の遊び方の見直し、安全に遊べるよう職員・子どもで確認しあう。学校と話し合いの機会を持つ。	1.定期的に実施	1	2.不定期に実施	数	2.不定期に実施	数	—	学校の固定遊具の為特になし。今後使用時に目視確認を行っていく。	1.集団活動中・見あ守り	—	—	1.いつもお様子であった	いつも遊ぶジャングルジムの遊びであり、いつものように慎重にして移動遊んでいた。歩いて渡れる空間をかがんで移動したり、上っ下りたりしていた。	2.対象児の至近で対象児見ていた	ジャングルジムのそばで、ジャングルジムで遊んでいた子たちの様子を見守っていた。倒れた瞬間は見ていないが、あっという声ですぐそばに駆け付けた。ジャングルジムの中でことで、職員の瞬時の行動が難しい状況であった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	—	ジャングルジムの中の渡れる空間で、背を丸め下を向いて移動していたため、足を踏み外して下に引っ張られた際支柱が歯に当たる位置なってしまってことで大きなけがとなってしまったと考える。	危険個所には職員を配置してる。危険と思われる行動に注意をしていく。	
2111	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	42								6	3	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	左足関節外果骨折		1.あり	1.定期的に実施	12	2.基準配置	—	職員を子どもの人数に合わせ配置し、視野を広げること。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	円形花壇の周りの鬼をたためバランスを崩し、転倒してしまう可能性がある。	鬼ごっこする際は、職員が必ず付き、いつでも声掛出来をを出来況にお状況してく。	1.集団活動中・見あ守り	長靴を履いて鬼ごっこをしていた。	長靴で遊びを行う際に声掛けを徹底する。	1.いつもお様子であった	朝、雨がっていた降ったため、長靴を履いて遊んでいた。	4.対象動児を見ていなかった	公園の手前側で見職員が、他児童の対応をしていたため、転ぶ瞬間を見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	グランドで遊ぶ子どもたちを見ていたため、見ていなかった。	鬼ごっこ長靴を、で行っていたため、特に注意しなければいけなかったが、事故当時は他の児童の対応をしていた。	鬼ごっこなど日常的に遊んでいる遊びでも、危険が伴うという認識を職員で再確認し、常に見守れるよう体制を取る。	
2112	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	29								3	2	22.10歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首骨折	2.自ら転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	1.基準以上配置	—	危険な可能性がある場合を想定した研修等を強化する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	1	2.不定期に実施	—	—	廊下を滑りにくくする対策をする。	1.集団活動中・見あ守り	—	児童各々が活動中は、数箇所に分かれて児童が遊んでいるので、全体に目が行き届くようにする。	1.いつもお様子であった		2.対象児の至近で対象児見ていた	対象児等を見守っていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の児童の見守りの等をしていた。	—	数箇所に分かれて児童が遊んでいるので、全体に目が行き届くように支援員が適切な場所にて見守りする。また、危険な可能性がある場合には注意喚起を徹底する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】									理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2113	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	17							2		1	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	2.なし	3.未実施		2.基準配置	—	定期的に職員への事故予防に関する研修を行い、子ども達の安全確保に努める。	2.不定期に実施	—	3.未実施		1.定期的に実施	—	—	定期的に安全点検を行い、危険箇所の把握と改善に努める。	1.集団活動中・見守りあり	—	室内、屋外で遊んでいる子ども達の見守りを徹底する。	1.いつもどおりの様子であった		3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	離れたところから、複数人の子ども達を見も守りしていたため、事故の瞬間は目撃していない。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	当日職員は2名で、一人は室内にいたため、対象児の見守りは行なっていない。	—	支援体制について、支援員の増員も含め検討していく。	
2114	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	46							6		4	22.10歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右前腕骨骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	1.定期的に実施	6	2.基準配置	特になし	今回の事故に対しクラブ会議で事故の状況を共有した。その際、当日の応急手当の処置が適切であったと病院で言われたこともあり、当日手当をした支援員に処置を再現してもらい全員で対処の仕方を確認し合った。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	特になし	校庭の遊具、砂場、植物、飼育については、常に学校との連携を取り情報の共有をしている。施設周りや遊具については日常的に点検をしている。	1.集団活動中・見守りあり	特になし	今回の事故は遊具の誤った使い方をしたわけではなかったが、このような事故につながってしまった。このことを踏まえ翌日に児童全体に向けて、このように遊具は正しく使っていても、事故につながることがあるのだから、なおさらルールを守って正しく使用する重要性を伝えた。	1.いつもどおりの様子であった		１７時を過ぎて室内に戻る途中であったが、児童が「もう一回」と言ってタイヤとびをした。その際にはケガに気づかず落ちついていたものの、患部を見てショックを受け、震えて泣き始めた。	2.対象児の近くで対象児を見ていた	児童に室内に戻るように声をかけ児童に背中を向けたところで事故が発生した。直後にそばにいた児童が目撃し支援員を呼んだため、駆け寄ってケガの状態を確認し室内に入れた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	外に居た職員４名は室内に戻りかけていたため、対象児の動きを見ていなかった。	特になし	どのような状況でも事故は起こり得るということを今後も児童に伝え続け、自らも危険回避できるよう働きかけていく。	
2115	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	33							2		1	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕部外側骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	—	1.基準以上配置	—	外遊び時には子どもが予想外の行動をすることがあるので、これまで以上に注意する。			2.不定期に実施	—			—	児童が遊具で遊ぶ際は、正しい使い方を徹底する。	1.集団活動中・見守りあり	—	—	3.いつもより活動的であった(理由を記載)	高学年の児童と遊ぶことで気持ちが高ぶっていた面があった。	2.対象児の近くで対象児を見ていた	児童の近くで見守っていたが、運動場を使っておくを使って児童が遊んで全体も見守る必要があった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	多くの児童が運動場で遊んでおり、全体を見守る必要があった。	—	外遊び時の安全指導に努める。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷		診断名		マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位					実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】								理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2116	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	43								6	5	21.9歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯　亜脱　白	3.子ども同士突いの衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	2.基準配置	クラブ舎に樹木が多く、その為クラブ舎まわりの道が狭くなっているので、鬼ごっこには適していなかった。	クラブ舎周りでは走らないように指導する。	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	特になし	使用していないため。	1.集団活動中・見守りあり	特になし	クラブ舎周りでは走らないよう指導する。	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変わりなくクラブ舎にをしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	一輪車に1人、ごっこは1人、鬼ごっこに1人、ドッジボール1人ついていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	２名は室育、もう１人は外で泥だんご作りについていた。	クラブ舎は狭くなっているところがあるのを把握していたにもかかわらず、対策を取ってこなかった。	クラブ舎裏支援員を配置する。	
2117	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	43								6	5	20.8歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	4.創傷(切創・裂創等)	2.顔面(口腔内含む)	「人咬傷右眉部挫傷」（顔面（右こめかみ）裂傷）	3.子ども同士突いの衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	1	2.基準配置	クラブ舎に樹木が多く、その為クラブ舎まわりの道が狭くなっているので、鬼ごっこにはごっこは適していなかった。	クラブ舎周りでは走らないように指導する。	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	12	特になし	使用していないため。	1.集団活動中・見守りあり	特になし	クラブ舎周りでは走らないように指導する。	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変わりなくクラブ舎にをしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	一輪車に1人、ごっこは1人、鬼ごっこに1人、ドッジボール2人ついていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	２名は室育、もう２人は外で泥だんご作りについていた。	クラブ舎は狭くなっているところがあるのを把握していたにもかかわらず、対策を取ってこなかった。	クラブ舎裏支援員を配置する。	
2118	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	40								4	4	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手小指骨折	8.その他	1.あり	1.定期的に実施	48	2.基準配置	—	児童の見守りと事故防止のための児童への注意を徹底する。	1.定期的に実施	44	1.定期的に実施	45	1.定期的に実施	44	—	安全点検に努め危険箇所を発見し、修繕等を行なっていく。	1.集団活動中・見守りあり	—	児童の見守りと事故防止のための児童への注意を徹底する。	1.いつもどおりの様子であった	ドッジボールで、ボールを取り損ねて手指を負傷した。	2.対象至で対児の近で象児を見た	館庭で見守っていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	遊戯室やクラブ室での児童での見守り等で、館庭で遊んでいた児童は見ていなかった。	—	突然の危ない行動による事故を防止するため、日頃から注意を徹底する。	
2119	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	29								4	2	18.6歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨骨折顆上骨折	5.他児から危害を加えられたもの	1.あり	2.不定期に実施	—	1.基準以上配置	新年度が始まったばかりで、新1年生も利用しており、児童も支援員も慌ただしかった。事故発生時、担当の支援員は別の児童に話しかけられて対応していた。	部屋にいる全員を見る必要があるため、1人との関わりが長引きそうなときは応援を呼ぶ。	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	—	2.不定期に実施	—	—	日常的に点検を実施しているので、今後も続ける。	1.集団活動中・見守りあり	—	部屋にいる全員を見る必要があるため、1人との関わりが長引きそうなときは応援を呼ぶ。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通り積木で遊んでいた。	4.対象児の動きを見ていなかった	他の児童に呼ばれて話をしていた。泣き声がして対象児のところへ行った。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の部屋や、外遊び等で全員が別々の場所で児童の見守りをしていた。	—	職員１人で部屋にいる全員を見る必要があるため、児童１人との関わりが長引きそうなときは応援を呼ぶ。	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制										教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面								環境面			人的面							
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2120	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	31								3	2	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手小指骨折	3.子ども同士突衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	2	1.基準以上配置	特になし	今回の事例を職員で共有する。	1.定期的に実施	12	3.未実施		1.定期的に実施	—	特になし	学校遊具の使い方について、危険な仕様がないかどうかしっかり見守る。	1.集団活動中・見守り	特になし	手を守るため、サッカーのゴールキーパー用のグラブを準備	1.いつもどおりの様子であった		3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	校庭で他の児童とかかわりながら様子を見ていたが、本人が痛みを訴えたためすぐ駆けつける。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	校庭にいる職員は見ていたが、室内にいる児童もいるため室内外に分かれて保育しているため	特になし	室内外に職員を配置し児童の様子を把握しておりますが、今後、しっかり打ち合わせをして、危険な行為がないよう、しっかり見守るよう、意識を高める。	
2121	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	20								2	2	19.7歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手首骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	2.なし	3.未実施		2.基準配置	—	児童たちに周りをよく見て行動するよう声をかけていく。	2.不定期に実施	—	1.定期的に実施	2	2.不定期に実施	—	—	特になし	1.集団活動中・見守り	春休み期間中は通常より利人数が多く、見守りの負担が大きくなる。	支援員の適時配置や児童の過ごし方の工夫による見守り負担の軽減を目指す。	1.いつもどおりの様子であった	他の児童十数人とドッジボールをしていた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	体育館内でドッジボールの様子を見ていた。	2.担当者・対象児の動きをいなかった	体育館とクラブ室を行き来していた。	春休み期間中は通常より利人数が多く、見守りの負担が大きくなる。	支援員の適時配置や児童の過ごし方の工夫による見守り負担の軽減を目指す。	
2122	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	47								7	3	20.8歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首機骨骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	—	—	—	3.個人活動中・見守りあり	—	—	1.いつもどおりの様子であった		3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	事故が起こった時の対応が迅速であった。	今後も，危機管理の手引きを用い，迅速な対応を行っていく。	
2123	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	110								10	6	23.11歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左手首機骨骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	—	—	特になし	1.集団活動中・見守り	—	特になし	1.いつもどおりの様子であった		3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	支援員が見守りを行い，注意を配っていたが事故が起こってしまった。	見守りが必要な場面では，引続き支援を行っていく。	
2124	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	132								9	5	18.6歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左肘上腕顆上骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	—	—	特になし	3.個人活動中・見守りあり	—	特になし	1.いつもどおりの様子であった		2.対象至児の近で対象児を見ていた	対象児童の近くでの見守りを行っていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	支援員が見守りを行い，注意を配っていたが事故が起こってしまった。	見守りが必要な場面では，引続き支援を行っていく。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面									
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】													
2125	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	3								1	1	18.6歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨顆部骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	園全体としての、危険察知・事故防止する力が不十分だった。	園内研修の充実及び、園外研修にも積極的に参加し、園全体としての資質向上に努める。利用児童が理解しやすいように、危険と安全について知らせる。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	園全体としての、危険察知・事故防止する力が不十分だった。	園内研修の充実及び、園外研修にも積極的に参加し、園全体としての資質向上に努める。利用児童が理解しやすいように、危険と安全について知らせる。	1.集団活動中・見あまり守り	園全体としての、危険察知・事故防止する力が不十分だった。フローリングの床で、靴下を履いた活動きまま活動的をした事で、バランスをしやすくなり、転んだと考えられる。	園内研修の充実及び、園外研修にも積極的に参加し、園全体としての資質向上に努める。利用児童が理解しやすいように、危険と安全について知らせる。フローリング床で過ごす際は、基本的に「裸足」を徹底する。	1.いつもどおりの様子であった	けが発生時は本児を含めて3名いた。本児はお絵描きを片付け、他の2名の児童がブロック遊びをしている様子を見たから、靴下のまま室内でをして回り、バランスを崩し肘を打った。18：10から支援員等2名で全体（3名）の見守り。	3.対象から離れたところで対象見ていた	けが発生時、支援員等2名で3名の児童の見守りをしていたが、本ターンをして回り、バランス崩した瞬間、手を差し伸べたが間に合わなかった。	2.担当者・対象児の動きを見なかった	トイレに行くために一時的に席を外していた。	園全体としての、危険察知・事故防止する力が不十分だった。フローリング床で、靴下を履いた活動的な動きをした事で、バランスをやり、転んだと考えられる。	園内研修の充実及び、園外研修にも積極的に参加し、園全体としての資質向上に努める。利用児童が理解しやすいように、危険と安全知らせる。フローリング床で過ごす際は、基本的に「裸足」を徹底する。	
2126	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	41								4	3	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯の脱臼（2本）、顔面挫創	1.遊具等からの転落・落下	2.なし	3.未実施		1	1.基準以上配置	—	事故後の対応について研修を行う。事故後の対応マニュアル検討。	2.不定期に実施	—	2.不定期に実施	—	2.不定期に実施	—	—	—	加害者の子に特別な配慮が必要なことは指導員は間で伝えており、当日にも危険性を新しい指導員に伝えていたが、注意が欠落していた。	特別な配慮とする子への理解を深める為の研修・学習。	1.集団活動中・見あまり守り	1.いつもどおりの様子であった		2.対象至児の近で対象児を見ていた	非常勤（採用1カ月目）の指導員が目の前で見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	バスケットボールしている子の動きをる（遊具の方に行かない）	当該男児の見守りを指導員たが、1か月の指導員だった。採用1か月目	特別な配慮を必要とする子には、経験年数があり指導員が見守りを行う。	
2127	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	33								5	3	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左上腕骨顆上骨折	1.遊具等から転落・落下	1.あり	2.不定期に実施		12	1.基準以上配置	子どもの個性・特性に応じた配慮の必要性。	個々の発達段階に応じた見守りや配慮の徹底をする。	1.定期的に実施	290	1.定期的に実施	290	1.定期的に実施	290	新しい遊具での遊び方に不慣れであった。	毎日の点検のチェックリストを見直す。	1.集団活動中・見あまり守り	危険を予測して予測して回避させたり、事前に注意喚起をする。予測しても事故が起きるので、その時にはその場で抑止させる。	発達の個人差を踏まえ、個々の心身の状態を把握しながら育成支援を行う。	1.いつもどおりの様子であった	園庭へ出にくいすぐに補助輪付き一輪車を見つけ、乗ろうとした。	2.対象至児の近で対象児を見ていた	園庭へ出てたちの遊び相手をしながら、本児の活動を見守っていた。	2.担当者・対象児の動きを見なかった	各部屋でそれぞれのたちの活動を見ていた。	子どもと共に分かち合う「ケア的支援」、子安全を守る「養護的支援」、子どもの育ちを引き出していく「教育的支援」が関わる総合的な支援が必要。	子どもが危険に気付いて判断したり、事故等に遭遇した際に、被害を最小限にする「安全に関する事故管理能力」を身に付けられるように援助する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制										教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳									うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷					マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他								死因	負傷状況	受傷部位	診断名				実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】									理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2128	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	50								5		1	19.7歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	6.その他	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	腎外傷	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	—	・遊ぶ場所や遊具の使い方、遊び方のルール等を徹底する。 ・育成の遊ぶ場所を変更。	1.定期的に実施	毎	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	毎	遊具が密集していた為に足元が不安定であったと思われる。	・常設遊具付近で、鬼ごっこやサッカー等走り回ったり遊びはしないようにする。 ・ボールを立てて、立ち入り禁止の場所にすることを検討中。	1.集団活動中・見ありの守り	鬼ごっこ等走る遊びの時の転ぶ瞬間は、手立てがないのが現状。	・定位置における見守りだけでなく、巡回ながらの見守りや遊びの指導を行う。 ・支援員間の見守りの距離を広げてしっかり見守る。	1.いつもどおりの様子であった	学校が常設している縄跳び用の板付近で、友だち5～9人と鬼ごっこをして走り回っていた。	2.対象至って対象児の近く見ていた	支援員5人で、全体的に児童の遠の遊ぶ様子を見ていた。					—	外遊び時の見守り支援員の目が行き届くように監視エリアを定め、巡回しながら遊びの見守りや遊び方の指導を行う。	
2129	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	23								2		2	18.6歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	多重骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	2.なし	3.未実施			2.基準配置	—	—	2.不定期に実施	1	1.定期的に実施	1	2.不定期に実施	50	—	—	7.その他	—	バランスを崩しての転倒であり、環境面で改善を図ることは困難である。	1.いつもどおりの様子であった	—	4.対象児の動きを見ていなかった	同室にいたものの、事故が起きた時間は対象児童から目を離していた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	同室にいたもの、事故が起きた時間は対象児童から目を離していた。	—	児童が来た時点で怪我をしないよう呼びかけ、意識させる。	
2130	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	63								6		4	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左橈骨骨折	1.遊具等から転落・落下	2.なし	2.不定期に実施		1	1.基準以上配置	特になし	遊具の使い方を児童に周知徹底する。	1.定期的に実施	—	1.定期的に実施	—	1.定期的に実施	—	特になし	特になし	1.集団活動中・見ありの守り	特になし	今後も、遊具の点検を行う。	1.いつもどおりの様子であった	雲梯の1段抜かしをする為にジャンプしてしろうとした時に落ちた。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	雲梯の手前の側で見守っていたので、すぐに怪我の対応を行うことができた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	事故発生後、すみやかに対応を行った。	特になし	今後も、事故に対応できるように支援員による見守りを行う	
2131	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	35								4		2	18.6歳	1.男児	頭部の打撲はない様子だった。	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左肘骨折	5.他児危害を加えられたもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	側面が板壁になっている階段で、1年生の体格では全身が隠れてしまいに上がっている姿が見えなかった。	上がる階段、下りる階段を決め、目で分かるよう表示をした。階段下にマットを敷いた。帰室直後など児童が混みあう時は階段下に支援員を配置する。	1.定期的に実施		12	3.未実施		1.定期的に実施	12	側面が板壁になっている階段なので、建物の構造上死角になる。	壁を格子状のものに改築するなど。	1.集団活動中・見ありの守り	職員不足の為、階段全体が見渡せる場所に支援員を配置していなかった。2階に児童がいたが、対応できなかった。	児童が混みあう時は支援員が立ち位置を考え、見守る。	1.いつもどおりの様子であった	いつもと変りなく、2階へ荷物を置きに行った。	4.対象児の動きを見ていなかった	帰室している児童全員に荷物を置き、連絡帳を出すよう声掛けしたので、対象児個人だけを見ることはできなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	１名はおやつの準備で台所。１名は全体の出欠確認で入り口付近。1名はｸﾗﾌﾞ舎奥側で宿題を始めた児童の見守り。１名はフロアで帰室時の声掛け。	特になし	特になし	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																														掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面										
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】						理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか				
2132	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	8.学童	28								4		20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨折（左手小指）	8.その他	1.あり	1.定期的に実施		2	1.基準以上配置	特記事項等なし	事故後の処置として骨折の可能性も可能性も疑い、行動するべきだっ							特記事項等なし	発生場所が屋外での事故であり、施設に問題はないため、改善策は特になし	1.集団活動中・見あ守り	特記事項等なし	ボール遊び自体は問題なく遊べていた。当該時、他児も含めて注意すべき点は無かった。しかし、その後の支援員の処置の際には、突き指以外の可能性を疑い、対応すべきと考える。	1.いつもどおりの様子であった	遊び自体に楽しみながら取り組んでいた。ボールに対しても集中していた。	3.対象児が離れたところで対象児を見ていた	当該児童を含め8名で支援員も共に遊んでいた。個々の様子や動きにも注視していた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	その遊び以外の子と遊びながら、こちらの遊びにも時々入ってきていた。	特記事項等なし	処置の際には、あらゆる事態も想定し対応が必要であると考える。今回に関しては、突き指以外の可能性を疑い、対応すべきと考える。	
2133	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	8.学童	72								6		21.9歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	2.顔面(口腔内含む)	鼻骨不全骨折(ひび)	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施	—	2.基準配置	本児童は久しぶりの来館であったため、児童センターで友達と一緒に遊ぶことに気持ちが高まり、気持ちと体のコントロールがついていかず、支援員の状況判断より勝っていたため、事故が起こってしまった。	支援員等相互が、状況判断力や児童自身の危険回避能力や防衛力が高まる関わり方について研究事例研究を行ってくことで、支援力をより高めていく。	1.定期的に実施	開館日	1.定期的に実施	開館日	2.不定期に実施	開館日	遊戯室の床が滑りやすいこと	遊戯室で遊ぶ前には、濡れ雑巾などで靴の裏の埃を取り、準備運動についても入念に行努める。	1.集団活動中・見あ守り	気持ちが高まってまった児童しての声かけが不十分であった。	普段から、危険ばぬようが及ばぬよう声かけをし、来る児童に対し館童にはより一層注意のをする徹底する。	1.いつもどおりの様子であった	特に変わった様子はなく、遊びに参加していた。	2.対象の至近で対象児を見ていた	遊戯室全体を見渡せる位置に配置し、自由遊びを見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の部屋で、活動を見守っていた。	気持ちが高まってまった児童しての声かけが不十分であった。	普段から、危険ばぬよう声かけをし、来館する児童に対してはより一層注意の声かけをする徹底する。	
2134	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	74								6		19.7歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	3.未実施		1.基準以上配置	—	本事故を事例に扱った職員研修を実施する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	本事故については、施設・玩具上の異常はなかったため、なし	本事故については、施設・玩具上の異常はなかったため、対応なし	1.集団活動中・見あ守り	遊戯室と専用室では、それが好きな遊びをしていた。	遊戯室と専用室にはそれぞれ3名の職員を配置し、基準配置であったことから改善点はなし。	1.いつもどおりの様子であった	対象児は一輪車の操作に習熟しており、事故当日も普段どおりの様子であった	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	集団遊びのため、全体を見渡せるところで見ていた。対象児が落下する瞬間に合わなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	集団遊びのため、全体を見渡せるよう離れたところでいたが、他の児童の見守りを行っていたため、対象児の動きは見ていなかった。	特になし	集団活動中において、一輪車などの落下のおそれがあることを認識し、使用させる際は必ず至近距離での職員による見守りを行う	

No	概要					発生時の施設・事業体制												事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																											掲載更新年月日
																												ソフト面						ハード面								環境面			人的面										
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制		異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
				月	時間帯		人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他		うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡 死因	負傷 負傷状況	負傷 受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】															
2135	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	8.学童	40								3	3	23.11歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	骨折	2.自転倒・衝によるもの	2.なし	2.不定期に実施	—	1.基準以上配置	—	職員は適正な人数を配置しており、問題がない。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	—	施設には不備がなかった。	1.集団活動中・見あ守り	—	児童に対し注意喚起を行い、事故防止に努める。	1.いつもどおりの様子であった	ホールで自由に遊んでいた40人の児童を4人の指導員が見守っていた。常日頃からホールでは走らないことの約束をしていたが、当該児は、春休みの高揚感から、約束を忘れトイレに行くために走り出し、その勢いで立ったまま滑り出しトイレの入口に衝突したもの。	2.対象児の近で対象児を見ていた	4人の指導員が概ね見守る場所を手分けして全体を見守っていたが、突然走り出したのでいち早く近くに居た指導員が走るのを止めようと注意したが、当該児は聞くこと無くなく走り続けた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	狭いホールなので見守り管轄外の指導員は、声等かけ及び目配りもなく、トイレの入り口の角に衝突した。	—	突然の行動による事故を防止するため、職員間で連携し、児童への注意、声かけを行う。	
2136	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	64								7	7	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右橈骨遠位端骨折	2.自転倒・衝によるもの	2.なし	3.未実施		1.基準以上配置	特になし	職員配置は基準を満たしていたため特に改善策はない。	1.定期的に実施	毎	1.定期的に実施	毎	1.定期的に実施	毎	特になし	周囲に障害物はなく、校庭の状態もよく、周辺のこどもたちも特に危険な遊びをしていなかったため特に改善策はない。	1.集団活動中・見あ守り	特になし	支援員は適正に配置され、見守り体制はとれていたため改善策は特になし。	1.いつもどおりの様子であった	いつものように、心を許せる友達と会話を楽しみながら過ごしていた。	4.対象児の動きを見ていなかった	室内で保育をしていたため、見ていなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	対象児を眺め、児童全体を見ていたが危険な行動はしていなかった。支援員は目の前ではなく、遠目に見ていたため、受傷状況を詳細に把握できなかった。	氷嚢で冷やす処置をした後、傷めた箇所を触り痛みがないか、腫れていないか確認したが特に見られなかったため、大きなケガではないと判断してしまった。	本児の手の痛みの訴えを慎重に受け止め、適切に対処する。	
2137	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	72								5	2	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨端線損傷	2.自転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	校庭の隅に行った児童にも目を向けられる立ち位置につく。	段差等のある場所に、一輪車では行かないよう声かけをする。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	30	校庭に出る際の安全確認の必要性。	こどもが遊ぶ直前に確認を行う。	1.集団活動中・見あ守り	広いところへの誘いかけをしなかった。	狭いところに一輪車で入らないよう見守る。	1.いつもどおりの様子であった	日頃から一輪車にも乗っている。	2.対象児の近で対象児を見ていた	散在している児童5～6人を見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	室内へ戻る誘導をしていた。	職員の指示を聞いて動くことへの声かけ。	個々の児童の特徴を把握する。	
2138	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	1.施設敷地内(室内)	8.学童	35								2	1	21.9歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首骨折	2.自転倒・衝によるもの	2.なし	3.未実施		2.基準配置	私物は各自棚に入れ床に置かない。	室内では走らないなどのルールを徹底する。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	—	—	1.集団活動中・見あ守り	—	室内では走らないなどのルールを徹底する。	1.いつもどおりの様子であった	いつも通りの様子であった。気分があがったため、唐突に走りしてしまった。	2.対象児の近で対象児を見ていた	対象児の傍で様子を見守っていたが、唐突に走り出したため、注意をしようとした際に事故が起きた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の職員は、外遊びにいた。室内には6人しかいなかったので、1人で対応してもらっていた。	—	室内では走らないなどのルールを徹底する。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																							掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面								環境面			人的面							
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷		診断名		マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位					実施頻度【回/年】				実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】								理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
2139	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	1.施設敷地内(室内)	8.学童	20								4	3	18.6歳	1.男児		2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨折(左腕、左手指)	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	3.未実施		1.基準以上配置	—	事故当時、支援員は当時20人弱の子どもに対して4人体制だったため支援員の人数が要因ではないと考えるが、時期的にもっと細やかな配慮が必要であった。	2.不定期に実施	6	2.不定期に実施	6	2.不定期に実施	6	—	ロッカーの上に登ることを禁止する表示を行った。	1.集団活動中・見守り	—	子どもに注意の声かけをこまめに行う。	1.いつもどおりの様子であった	児童はロッカーに登ったかったようで実際に登った際、支援員が注意をしようとしたが間に合わなかった。	2.対象の至近で対象児を見ていた	児童はロッカーに登ったかったようで実際に登った際、支援員が注意をしようとした間に合わなかった。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	児童はロッカーに登ったかったようで実際に登った際、支援員が注意をしようとした間に合わなかった。	—	入所児童に改めて危険なことやしていはいけないことを伝える。	
2140	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	2.午前中	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	40								3	1	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手首・橈骨・尺骨の骨折とずれ	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	3.未実施		2.基準配置	新1年生が出てきて遊んでいた。そちらを重点的に見ていた	指導員の配置人数の増加	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	10	1.定期的に実施	1	—	—	1.集団活動中・見守り	—	—	1.いつもどおりの様子であった	いつも通り元気にサッカーをしていた	4.対象児の動きを見ていなかった	1年生の方を見るように言われそのの場にいなかった。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	1年生に気をとられていた。	—	配置変更は行わない1年生に気を取られて見てない事が無いようにする。	
2141	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	20								3	3	18.6歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	骨折（左手首）	1.遊具等の転落・落下	2.なし	1.定期的に実施	毎	1.基準以上配置	本児は運動神経が良く、うんてい使用なため、本児の近で見てくく守っていなかった。落下時に補助することができなかった。	危機感を持って近くでかわる。	1.定期的に実施	毎	1.定期的に実施		1.定期的に実施	12	うんていの高さが２ｍあり、１年生には高すぎるかもしれないが、学校側も１・２年生の使用を許可している。	低学年の利用時には、落下を想定した見守りを行う。	1.集団活動中・守り	うんてい周辺も危険なものなし。	低学年の利用時には、落下を想定した見守りを行う。	1.いつもどおりの様子であった	身軽で運動神経がよく、機敏に動く。	3.対象児から離れたところで対象見ていた	うんていから1m付近で全体を見守り中に、本児の落下に気付き児童に近寄る。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	１人はうんていから4m離れた別の固定遊具で遊ぶ児童を見守っており、もう一人は室内で過ごす児童のみを行っていた。	本児は運動神経がよく，うんてい使用なため、支援員も安心して見守っていた。	鉄棒と一緒で、うんて使用の時も支援員がつき、上手な子でも危機感を持ってかかわらなければならない。	
2142	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	4	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	50								8	4	18.6歳	2.女児	帰宅後、痛みを訴えたことから、病院を受診、骨折と診断された。平成30年５月22日に完治と診断。	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	1.定期的に実施		2.基準配置	「まさかそれだけで骨折することはない」という思い込みがあった	思い込みは危険だ、と認識し確認を怠らないこと	1.定期的に実施	12	3.未実施		2.不定期に実施	12	撤去できない危険個所について児童達に周知させる必要がある	ケガにつながりそうな場所は避けて通るように言葉かけをする	2.集団活動中・子ども達のみ	室内と庭に分かれての見守りになるため要所要所での見守りに専属配置ができない	できるだけ死角ができない場所を選んでたつように掛ける	1.いつもどおりの様子であった	気持ち良い天気だったので庭でぶぶら歩いていた	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	危険な要因がなかったので離れた場所で見守っていた	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	いくつもグループに分かれて遊ぶため、それぞれのグループの近くで、あるいは一緒に遊びながら見守りをしていた	つまずいただけで外傷はなかったので大丈夫だと思いこんだ	念のためひねった場所を触診する、しばらく時間がつき、上手離設する、などすべきだった	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面						ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡		負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】						実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】													
2143	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	16								2	2	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯の打撲・損症	8.その他	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	・園庭遊びを行う際の見守り体制が常に一人であった ・支援員がマニュアルに沿った行動を出来ていなかった	・運動遊びを行う際は複数の体制で見守りをするようにする ・支援員が働きかけてもクラブ様子をもう一人の見ようにする ・マニュアルを徹底する	1.定期的に実施	50	1.定期的に実施	毎日	1.定期的に実施	毎日	・支援員が講じた水飲み場周辺の安全対策が全て適切でなく、不十分であった	・各環境における安全管理を見直し、それぞれの場所に適切な対策を行い、再発防止を徹底して行う	1.集団活動中・見守り	・ボール遊びが激しくなっている状態が見られなかった	・環境に適さない活動を行わないようにし、環境における安全管理を工夫し、再発防止を徹底して行う ・学童における遊びで身体の接触が激しいものは避ける	1.いつもどおりの様子であった	ゴールキーパーからパスを渡し、ボールを見てドリブルしながら前進した	3.対象児が離れたところで児を見ていた	園庭の築山やその周囲にあるタイヤがボールの妨害となり、出ないように掻き出すことがあったことから、園庭の側にあるタイヤを運び見守った。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	クラブ建物の室内で残って遊んでいた児童を見ていた	・危険な場所に支援員がおらず、また、ボールや動いている児童の近くで状況を把握できていなかった ・体が重なり動きがあった時点でとまるべきだった ・歯が欠けた時に歯をそのままにしていなかったその見つけられなかった ・支援員が見ていながらながめるだけで止めることが出来ずおらず、また見ていた状況を適切に説明できなかった	支援員の危機管理についての意識を高めるように、児童らも安全になると共に、児童らが安全に作っていくと考えるとすると共に、危険な行為は徹底し、常に声かけを止め、常に注意を促す	
2144	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	71								8	4	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右尺骨骨折	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	1.定期に実施		12	1.基準以上配置	児童が転倒した際すぐに立ち上がらなかったため、他児とぶつかってしまった。	児童に転倒をしたら、すぐに立つよう注意喚起。また、周囲を見て行動するよう指導。	2.不定期に実施	1	1.定期的に実施	毎	1.定期的に実施	毎	サッカーに夢中になると激しい動きになった際、他児と接触する可能性が高まる	サッカーに夢中になる児童にまず周りも見て行動する様指導し、他児とぶつかることの危険性を伝える。	1.集団活動中・見守り	広い校庭の為、遠くから見渡せるがサッカーなどもの動きに合わせて行ける範囲で見守ること。	子どもたちが興奮していたり、疲れ気味な場合は、注意深く見守る。	1.いつもどおりの様子であった	サッカーが人気で、集団でサッカーの試合をしていた。	2.対象児の近くで対象児を見ていた	職員1名数が大人のサッカー見守りをしていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の場所の見守りをした。	外遊びの時間が迫っていることに起きた事故で、子ども興奮気味になっていた。	外遊びが終了時間に迫っていたら、5分前の呼びかけをする。	
2145	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	176								15	5	21.9歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右手小指骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施		1.定期的に実施	—	—	特になし	1.集団活動中・守り	—	特になし	1.いつもどおりの様子であった	—	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	支援員が見守りを行い，注意を配っていたが事故が起こってしまった。	見守りが必要な場面では，引続き支援を行っていく。	
2146	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	2	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	117								16	4	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	左小指骨折	2.自らの転倒・衝によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施		1.定期的に実施	—	—	特になし	1.集団活動中・見守り	—	特になし	1.いつもどおりの様子であった	—	4.対象児の動きを見ていなかった	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	支援員が見守りを行い，注意を配っていたが事故が起こってしまった。	見守りが必要な場面では，引続き支援を行っていく。	

No	概要					発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか		
2147	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	3	7.午後	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	84							17	9	20.8歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	左肺骨遠位骨端腺損傷	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために，事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに，事故防止に努める。	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	1	1.定期的に実施	—	—	特になし	1.集団活動中・見守り	—	特になし	1.いつもどおりの様子であった	—	4.対象児の動きを見ていなかった	全体の見守りの中で，対象児童も見ていた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	全体の見守りの中で，対象児も見ていた。	支援員が見守りを行い，注意を配っていたが起こってしまった。	見守りが必要な場面では，引続き支援を行っていく。	
2148	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	36							3	1	20.8歳	2.女児	15：18　登所 15：25　着替えを済ませ、宿題に取り組む。 16：30　おやつ 17：00　各自好きな遊びを開始。当該児童はドッジボールをして遊んでいた。 17：05 ドッジボール中に投げられたボールを避けた際に転倒。泣き声に支援員が気付き、室内に運び応急処置。 17：15　保護者へ連絡。保護者お迎え後に病院受診。	1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	左足脛骨骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	—	改善点なし 理由：当時は運動場で遊んでおり、遊ぶスペースとして十分な広さが確保できていた。	2.不定期に実施	3	2.不定期に実施	3	2.不定期に実施	3	—	改善点なし 理由：当時は運動場で遊んでおり、遊ぶスペースとして十分な広さが確保できていた。	1.集団活動中・見守り	—	改善点はないが、運動場は広く、広範囲での見守りになるため、遊び場の範囲を子どもたちと一緒に考えていく。	1.いつもどおりの様子であった	ボールを使って遊んでおり、ボールが当たるのを防ぐため回避行動をとった。	4.対象児の動きを見ていなかった	対象児とは別の児童を近くおり、対象児が転倒し泣いた為事故に気付く。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	それぞれ持ち場近童の保育をしていた。事故後は他の児童も室内に誘導。	—	改善点なし 理由：外遊びに支援員１名、補助員１名を配置しており、配置は十分だった。	
2149	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	1	1.朝(始業～午前10時頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	26							2	1	20.8歳	2.女児	7：55登所 8：45保育室内の畳の上に移動する際、畳の縁にて右足をつまずく。転倒はしなかったが、右足薬指が赤くなり薬指の付け根に痛みがあったため、しばらくの間患部を冷やす。（その後、湿布を貼り様子観察） 17：00幹部の内出血と腫れが足首まで広がっていたため、お迎え時に保護者へ状況説明。その夜、患部が腫れて紫色になったため病院受診。	2.室内活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	5.下肢(足・足指)	右足薬指骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	1.定期的に実施		1	2.基準配置	—	なし 理由：事故当時は支援員１名、補助員１名を配置ができており、土曜日なので登所人数も少なく十分に対応ができていた。（事故当時は9名が登所）	1.定期的に実施	12	2.不定期に実施	4	1.定期的に実施	12	—	日頃から児童がくつろぐスペースとして畳を置いている状況ではあるが、何かに夢中になっているとつまずく可能性もあるため、配置を検討する。	1.集団活動中・見守り	—	なし 理由：登所人数も少なく、遊びの展開も室内でも3ヶ所ほどだった。朝の自由時間でもあり個々にゆっくりとした時間を過ごしていた。	1.いつもどおりの様子であった	畳の上に座っていた友達の側へ行く際、畳の縁でつまずく。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	事務机の児童が歩いている姿を見ていて、つまずく姿も確認。児童が痛みを訴えてきたので患部を確認し、冷却をした。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	別の児童の対応をしており、対象児童の動きは見ていなかった。	—	なし 理由：事故当時は支援員１名、補助員１名の配置ができていた。（基準配置）	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況							事故発生の要因分析																									掲載更新年月日
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	事故発生時期		発生場所	発生時の体制									教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰					事故誘因	ソフト面					ハード面							環境面			人的面								
				月	時間帯		人数	異年齢構成の場合の内訳								うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等						死亡	負傷				マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
								0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他							死因	負傷状況	受傷部位	診断名			実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】							理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか		
2150	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	12	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	41							7	5	21.9歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右上腕骨近位部骨端線損傷	3.子ども同士の衝突によるもの	1.あり	3.未実施		1.基準以上配置	—	今後、考えられる事故について職員で話し合い、周知する。	2.不定期に実施	—	3.未実施		3.未実施		グランドの中で、ボールを使用する場所など、コーンを置いて決めていたが守れていなかった。	遊びの種類によって危険がないように、グランドの明確な分け方をする。	1.集団活動中・見守りあり	外遊びの時の危険防止のための約束ごとなどを作成していなかった。	再度、遊びの種類によって危険のないように細かい約束やルールなどを提示する。	1.いつもお様子であった	—	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	—	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	—	支援員が2人いたが、児童が少人数相手にしていることから、全体を見ての遊んでだけ手によって遊んでいるように指示していたが、指導員全体は出来なかった。	このような状況の場合に、早めにぶつからない状況へと変えることが出来るように、再度指導員全員に数人だけを相手にするのではなく、全体を見て、しっかり見守るように指示する。	
2151	平成30年6月29日	3.その他	15.放課後児童クラブ	5	8.夕方(16時頃～夕食提供前頃)	2.施設敷地内(室外・園庭・校庭等)	8.学童	140							10	4	19.7歳	1.男児		1.屋外活動中	1.負傷	0.負傷	2.骨折	4.上肢(腕・手・手指)	右肘骨折	1.遊具等からの転落・落下	1.あり	2.不定期に実施	—	2.基準配置	事故が起きたときのために、事故防止マニュアルの整備ができていた。	策定している危機管理の手引きをもとに、事故防止に努める。	1.定期的に実施		1.定期的に実施		1.定期的に実施	—	—	特になし	3.個人活動中・見守り	—	特になし	1.いつもお様子であった		2.対象至対児の近で対象児を見ていた	対象児童での近くを見守りを行っていた。	1.担当者・対象児の動きを見ていた(至近距離にいた)	全体の見守りの中で、対象も見ていた。	支援員が見守りを行い、注意を配っていたが起こってしまった。	見守りが必要な場面では、引続き支援を行っていく。	
2152	平成30年6月29日	2.認可外	18.その他の認可外保育施設	4	2.午前中	3.施設敷地外(園外保育先・公園等)	7.異年齢構成	9	0	0	0	3	6	0	0	0	2	1	16.4歳	2.女児		1.屋外活動中	1.負傷	2.骨折	3.体幹(首・胸部・腹部・臀部)	右鎖骨骨折	2.自らの転倒・衝突によるもの	1.あり	2.不定期に実施	1～2	2.基準配置	マニュアル更新の頻度を高めるかも（細かい修正も含め都度実施すること）	ミーティングによる危機意識や知識の向上を図り、事故を未然に防止する。また、発生時の対応を確認する。全職員で再発防止の徹底を行う。	1.定期的に実施		4.定期的に実施		1.定期的に実施		各年齢が使用できる遊具を認識しておくことが必要	現地到着時での危険箇所の事前確認	1.集団活動中・見守り	外部研修などに参加し、事故事例などから事前に注意を払う	戸外活動場所に到着時では、園児、スタッフに「危険の箇所」の共有、さらに、職員間において活動内容について密に連携しておく。	3.いつもまで活発で活動的であった(理由を記載)	新年度開始にあたり、園児にのもきがない状況だった。	3.対象児から離れたところで対象児を見ていた	職員も突然（駆け出してしまった）の行為に関し、抑止することが難しかった。山の斜面に居たこともあり、ドトにスピードが出ていたと思われる。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	他の職員も担任同様、園児逐が突然駆け足で下る山ことに予測が出来ていなかった。	園を発際する場所での活動に、注意事項を園児に知らせるべきだった。	子どもの活動中は常に子供に目を配り、危険な行動をしている子については、サポートしたり、注意を行い、事故が無いように心がける。危険と予測される場所がある場合は前もって声をかける。活動前に約束事等を子どもたちに伝えてから始める。	

No	概要						発生時の施設・事業体制											事故にあった子どもの状況			事故状況						事故発生の要因分析																												掲載更新年月日
																											ソフト面						ハード面								環境面			人的面									
				事故発生時期																																																		
	初回掲載年月日	認可・認可外	施設・事業所種別	月	時間帯	発生場所	発生時の体制	人数	異年齢構成の場合の内訳							教育・保育等従事者		年齢	性別	特記事項	発生時状況	事故の転帰				事故誘因	マニュアルの有無	事故予防研修		職員配置	その他要因・分析、特記事項	改善策	施設の安全点検		遊具の安全点検		玩具の安全点検		その他要因・分析、特記事項	改善策	教育・保育・育成支援の状況	その他要因・分析、特記事項	改善策	対象児の動き		担当職員の動き		他の職員の動き		その他要因・分析、特記事項	改善策	
									0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳以上	学童	その他	うち保育教諭・幼稚園教諭・保育士・放課後児童支援員等					死亡	負傷						実施頻度【回/年】				実施頻度【回/年】		実施頻度【回/年】					実施頻度【回/年】				理由		具体的に何をしていたか		具体的に何をしていたか			
																						死因	負傷状況	受傷部位	診断名																													
2153	平成30年6月29日	2.認可外	18.その他の認可外保育施設	9	2.午前中	1.施設敷地内(室内)	4.3歳児クラス	6								2	2	16.4歳	2.女児		2.室内活動中	1.負傷		5.口腔内受傷	2.顔面(口腔内含む)	歯根破折	8.その他	1.あり	2.不定期に実施	1～2	1.基準以上配置	安全面でも英語講師に任せており職員の意識が欠けていた。英語学習中の園児間の悪戯や悪ふざけについては保育士が注意し、転倒等の事故が起こらない見守る。	研修内容の見直し、園内研修にて情報共有を行う。	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	1.定期的に実施	12	密集した状況で怪我、事故が起こりやすい状況であった。	椅子・机等の配置を見直す。	2.集団活動中・子ども達のみ	ダンス等、身体を動かすには部屋が狭い上、椅子の配置が悪く、園児が密集し事故が起こりやすい状況であったにもかかわらず保育従事者が一人も見ていなかった。	英語レッスン中もに保育士による安全管理を徹底して行う。	1.いつもどおりの子であった		4.対象児の動きを見ていなかった	担当以外の保育士が室内にいたが、保育教材の片付けのため退室していた。また担当保育士は次の準備をしていた為、他園児が悪戯をしていたり悪ふざけしていたのを見逃していた。	2.担当者・対象児の動きを見ていなかった	担当以外の職員が室内に待機していたが、保育教材の片づけの為事故の瞬間に退室してしまった。	保育室退出時の他の職員への言葉がけをする意識が欠けていた。また、同士の一に見えるすぐ見ても遊びすぐ大きく等も重大な事故につながる意識が徹底されていなかったことも要因の一つである。	いつ事故が起きるかわからないという意識を持ち退室は他の職員に声をかけ不在の時間をつくらない。また常に事故がおこりうる状況を想定し園児への言葉かけ等を行う。	